

中部大学民族資料博物館

年報 13号

2024

ANNUAL REPORT

Volume 13

2024

Museum of Ethnology Art

Chubu University

年 報

13号

ANNUAL REPORT

Volume 13

令和 6 年

2024

中部大学民族資料博物館

Museum of Ethnology Art
Chubu University

Annual Report of Museum of Ethnology Art
Vol. 13, 2024

Edited and published by
Museum of Ethnology Art, Chubu University
Matsumoto-cho 1200, 487-8501 Kasugai-shi,
Aichi, Japan

Printed by
Fuji Printing Industry Co.,Ltd

©Chubu University

目 次

巻頭言	5
-----------	---

1. 博物館活動報告

展示（常設展・企画展）	8
講演	21
講座	23
実績	
1. 開館日数・入場者数	25
2. 団体見学	26
3. 出版	27
4. 広報	30
5. 資料収集・保存	31
6. 教育・普及	31
7. 調査・研究業績	32
8. 出張業務	33
9. 会議	34

2. 組織・施設

組織	
1. 職員	36
2. 運営委員	36
3. 外部専門委員	37
4. 諸規程・要綱	38
施設	44

3. 論文・研究調査

研究ノート：片岡球子の色彩表現と造形性について (2) ～絵画表現としての金箔の扱い 原田 千夏子	46
---------------------------------------------------------------	----

Contents

Director's Foreword	5
---------------------------	---

1. Activities

Exhibitions: Regular / Special Exhibition	8
Lectures	21
Courses	23

Our Work

1. Opening Days / Visitor Statistics	25
2. Group Tours	26
3. Publication	27
4. Public Relation	30
5. Acquisitions / Preservation	31
6. Learning Programmes and Events	31
7. Research	32
8. Staff Work outside the Museum	33
9. Meetings	34

2. Organization and Management / Facility

Organization and Management

1. Museum Staff	36
2. Steering Committee	36
3. External Expert Advisers	37
4. Regulations	38

Museum Facilities	44
-------------------------	----

3. Article and Research Report

HARADA Chikako,

Research Note: <i>KATAOKA Tamako's color expression</i> <i>and form(2) – The Use of Kinpaku as the creative painting</i> <i>expression</i>	46
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----

巻頭言

2024年度における中部大学民族資料博物館の開館日数は187日、入館者数の合計は4,554名であった。これに学内別会場での博物館主催・特別講座の参加者延べ312人を加えると総計4,866名となる。入館者の内訳としては高校32件、中学校1件、小学校2件、保育園1件、大学社会人向け講座CAAC(中部大学アクティブアゲインカレッジ)1件などと、父母との集いやオープンキャンパス等の大学行事に加え幅広い世代の方々にご来館頂いた様子が見て取れる。

ついでには近年の来館者増などにも対応すべく、館内の一部リニューアルを行った。まず事務室を展示室内に移動して来館者への対応や各種業務の効率化を図るとともに常設展示のアフリカ地域コーナーを再編し、松浦コレクションの仮面資料などを再配置した。また事務室のそばに関連図書などを配架し、組み合わせ可能な大型テーブル、椅子などからなるスペースを設け、休憩や学習等で活用できるようにした。

展示では春・秋で計2回の企画展に加え、6月から7月にかけては常設展に案内コーナー展示を設け計3回となった。この展示では「中部大学におけるトルコ文化人類学研究—中山紀子教授の調査と研究」と題し、館が所蔵する民族衣装などの解説を交えながら現代トルコの研究で知られる中山教授のフィールドワークの様子などを紹介した。そして10月15日から12月20日にかけては人文学部の岡本聡教授が所蔵する貴重な古典籍コレクションを用い、江戸時代の俳聖である松尾芭蕉とその門人が収集した牡丹に焦点をあてた展覧会「江戸の牡丹ブームと芭蕉」を実施し、1,300人近い来場者数があった。こうしたコーナー展示や展覧会は大学における調査や研究の様子を館のコレクションなどを用いて紹介するものであり、文理医教8学部からなる総合大学の情報発信の場として本館を位置づける試みでもある。

また地域への教育普及活動の一環として実施している古典絵画の特別講座では、本館外部専門委員である下川辰彦氏によるご指導の下、日本画の実技制作を通じて絵画の材料や伝統技法を学ぶ場を提供しているが、作品展を3月21日から5月30日までの期間で実施し、今回は風炉先屏風制作の成果が披露された。その伝統技法の現代への応用などについては、原田千夏子学芸員が現代日本画家として異彩を放つ片岡珠子の色彩表現と造形性について金箔の扱いに着目した研究ノートを本年報に寄せており、あわせてご覧頂ければ幸いである。

世界情勢が流動的でさまざまな方面での格差が顕在化しつつある昨今ではあるが、互いを理解・尊重し、多様性を認める社会のあり方を引き続き発信していく所存である。ついでには末筆ながら日頃から館の活動を支えて下さっている民族資料博物館の運営委員や外部専門委員の方々、中部大学や学園関係者の方々、そして本館に足を運んで下さるすべての方々に深く感謝と御礼を申し上げ、巻頭の言葉とさせていただきます。

中野 智章

(中部大学民族資料博物館館長、国際関係学部長・教授)



博物館概論講義風景 2024年5月15日（左・中野館長）



見学者に向けて館の概要を説明する様子（左・館長）

博物館活動報告



2024秋季企画展案内 民族資料博物館入館案内
(附属三浦記念図書館1階)

常設展

会場： 民族資料博物館 展示室
期間： 2024年4月1日（月）～2025年3月31日（月）
内容： 当館所蔵資料より展示コンセプトをもとに選出した資料を展示。

展示コンセプト

「陸と海の交流史とともに眺める世界」

ゾーン別テーマ

「戦争と平和～ガンダラ美術と日本画の今」

「世界史に登場する交易ネットワーク関係と民族資料」

「受け継がれてきたのは、祈りを捧げ 身につけるもの」

出品： 約640点

入館： 4,554人

常設展示アフリカ地域のコーナー展示再編の試み

実施時期： 2024年2月～3月

場所： 中部大学民族資料博物館 常設展示
(第2室 地域研究エリア・アフリカ)

2025年3月に、館の事務室を展示室内に移転することになり、展示室に設けていた学習スペース、および図書コーナーの一部を、展示室の一隅に設けることとなった。これにより、常設展示のアフリカ地域の展示ゾーンを一部改編することによりスペースを確保することとなった。アフリカ地域の展示内容は、松浦コレクションの仮面資料と学内教員の研究資料、そして館蔵の民族資料から構成しているため、それぞれの点数を厳選して見直した。また、この機会に展示壁面に活用していた黒色布を撤去し、新たにアフリカの仮面文化を育んだ森林地帯をイメージさせるよう緑色の布を採用した。これにより、その他の展示ゾーンを含めた常設展示空間全体において明るい調和した空間作りへとつながった一方、ゾーン毎に目に優しい壁面布の配色の違いにより、ゆるやかな区分表示を効果的に設けることにもなったと思う。

また、解説パネルについては、2023年度の企画展における追加情報をもとに改訂するほか、付属の写真パネル、地図資料パネルともに常設展示空間全体における動線上の来館者の視点を意識して想定し、サイズや設置方法等を検討し再作成のうえ設置し直した。

今後は、このアフリカ地域展示ゾーンに隣接するかたちで、新たに学習用のゾーン作りを計画していく予定である。
(原田)



2024年3月再編後のアフリカ展示ゾーン

中部大学におけるトルコ文化人類学研究

—— 中山紀子教授の調査と研究

会場： 民族資料博物館 シルクロード室、附属三浦記念図書館1階エントランス

期間： 2024年6月2日(日)～7月1日(月)

内容： 2024年は、日本とトルコの外交関係樹立100周年に当たる記念の年であるとともに、本学国際関係学部創設40周年の節目を迎える年であることから、当館では、国際関係学部が開催する記念シンポジウム(2024年6月21日開催)に合わせ、トルコ地域を対象とした文化人類学を専門とする中山紀子教授(中部大学国際関係学部国際学科)の研究関連資料や同教授のトルコ交流における思い出の品を展示紹介した。

出品： 13点

企画： 中部大学民族資料博物館

協力： 中部大学国際関係学部

入館： 477人

2024年はトルコと日本の外交関係樹立100周年にあたり、日本とトルコの両国で様々な記念行事が行われた。私自身も6月21日に本学においてトルコ人を含む4人の研究者による講演会を企画し、記念行事の一環とした。2024年はまた国際関係学部創設40周年にあたり、この講演会は学部の記念行事ともなった。講演会開催に合わせて、民族資料博物館長でもある中野智章国際関係学部長から本企画「中部大学におけるトルコ文化人類学研究——中山紀子教授の調査と研究」を提案していただき、当初は恐れ多いと思ったものの、これもなにかの巡りあわせと覚悟を決めた。こうして、博物館スタッフの献身的なご協力のもと、私の調査資料や関連書籍が6月2日から7月1日までの1か月間民族資料博物館シルクロード室に展示された。展示資料を準備する期間は短く慌ただしくはあったが、可能な限り自分とトルコ人との交流を理解してもらえる資料を選んだ。展示資料についていくつか感想を述べたい。まず、すでに寄贈していたトルコの民族衣装が飾られたことである。この服は購入したものではなく、私が1980年代にトルコ留学から帰った直後に筑波科学博のトルコレストランでバイトをしたときに記念にもらったものである。ほかにトルコ絨毯のデザインを模したベストや羊毛フェルトのベスト、チャイセットや私の研究テーマであるトルコ女性の被るスカーフをいくつか展示した。多くはトルコ人たちからのプレゼントであり、トルコ人との交流から得たものといえる。次に関連書籍であるが、総数52点であった。展示が貧相になるのを避けるため、学生のところに書いたものまで展示した。最初の著書は『地球の歩き方21：トルコ'87～'88年版』(ダイヤモンド社、初版)であった。また、スタッフによる展示の仕方が功を奏して、6月21日の講演会の日に出席が叶った名古屋トルコ共和国総領事とともに博物館を訪問してくれた秘書のセダー氏が、「コロナ禍下におけるトルコ人のユーモア」(「信頼」66)の記事を見て笑ってくれた。トルコ人のユーモアセンスを高く買っている私は我が意を得たりという気持ちだった。最後に、この展示のなかでもっとも貴重だと思うのは、私がフィールドワークの村を撮影した映像である。現在でもフィールドワークをした村の人々と毎年のように会って交流を続けているが、人々は何よりも昔の写真や映像を喜ぶ。交流を継続させる映像の重要性を改めて噛みしめている。

(中山)

「中部大学におけるトルコ文化人類学研究」展 案内リーフレット



中部大学

民族資料博物館企画 常設展示室内コーナー展示

中部大学における トルコ文化人類学研究

2024.6.2[日]－7.1[月]



－中山 紀子教授の 調査と研究

中部大学民族資料博物館
シルクロード室(附属三浦記念図書館2階)
1階エントランス展示(附属三浦記念図書館1階)

主催：民族資料博物館 協力：国際関係学部
＜入場無料＞
＊6月2日(日)、8日(土)、22日(土)は
大学催事につき特別開館
＊会期中は館内の図書コーナーにも関連書籍を紹介

2024年は、中部大学国際関係学部の開設40周年、日本とトルコの
外交関係樹立100周年に当たります。民族資料博物館では
国際関係学部の記念シンポジウム(2024年6月21日開催)開催に合わせ
トルコ地域を対象とした文化人類学を専門とする
中山紀子教授(中部大学国際関係学部国際学科)の研究関連資料や
同教授のトルコ交流における思い出の品を紹介します。



中部大学民族資料博物館
MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

【開館時間】9:30～16:30(入場は閉館の30分前まで) 【休館日】土曜・日曜・祝日・年末年始・大学が定める休日
【入場料】無料 ※行事開催日は開館予定 <https://www.chubu.ac.jp/student-life/facilities/museum/>
愛知県春日井市松本町1200 TEL.0568-51-9193 E-mail minzoku@office.chubu.ac.jp

「中部大学におけるトルコ文化人類学研究」展 出品リスト

2024年度 中部大学民族資料博物館 企画
常設展示室内コーナー展示

「中部大学におけるトルコ文化人類学研究 ―中山紀子教授の調査と研究―

会期：2024年6月2日（日）～7月1日（月）＊開館時間：平日9時30分～16時30分

6月2日（日）、8日（土）、22日（土）は、大学催事につき特別開館

場所：シルクロード室（中部大学民族資料博物館）、1階エントランス展示（附属三浦記念図書館）

主催：中部大学民族資料博物館

協力：中部大学国際関係学部

2024年は、中部大学国際関係学部の開設40周年、日本とトルコの外交関係樹立100周年に当たります。
民族資料博物館では、国際関係学部の記念シンポジウム（2024年6月21日開催）開催に合わせ、
トルコ地域を対象とした文化人類学を専門とする中山紀子教授（中部大学国際関係学部国際学科）の
研究関連資料や同教授のトルコ交流における思い出の品を紹介します。

No.	種別	名称	形状	材	寸法 (cm)	数量	所蔵等	展示
1	パネル	研究履歴（概要）	日英 パネル	—	—	1	（一部抜粋）	2F
2		民族衣装について（中山教授の思い出コメント）	日英 パネル	—	—	1	（2014企画展解説より）	2F
3		2013年度 チャレンジ・サイト活動記録 「トルコへのスタディ・ツアーの事前研究」 （国際関係学部）	パネル	—	—	5	提供：中山研究室	2F
4	書籍 （付属）	研究書籍	書籍	—	—	55	個人蔵 （提供：中山紀子教授）	2F
		主著紹介 『イスラームの性と俗：トルコ農村女性の民族誌』	書籍	—	—	1	館蔵	2F
		展示研究業績リスト	日英 リスト	—	—	1	作成：中山紀子教授 （英訳版作成：2016年4月当時）	2F
5	展示 資料	民族衣装（トルコ）	衣料	布 金属	—	一式	館蔵 （中山紀子教授 寄贈）	1F
6		織物「キルム」のベスト [民族衣装（トルコ）]	衣料	織布	45×58	1点	館蔵 （中山紀子教授 寄贈）	1F
7		羊毛のベスト [民族衣装（トルコ）]	衣料	羊毛	52×60	1点	館蔵 （中山紀子教授 寄贈）	1F
8		チャイグラス（トルコ・チャイ用）	食器	ガラス	グラス高9	一式	個人蔵 （提供：中山紀子教授）	2F
9		チャイポット（トルコ・チャイ用）	食器	金属	高20.5	一式	個人蔵 （提供：中山紀子教授）	2F
10		トルコ女性用のスカーフ「バシュオルトゥス」	衣料	レース編、 ビーズ		8点	個人蔵 （提供：中山紀子教授）	2F
11		トルコ・コーヒー用の器	食器	金属		一式	館蔵（参考）	2F
12	映像 資料	トルコ文化人類学研究調査の記録映像（1997年8月）	動画映像	—	—	約50分	個人蔵 （提供：中山紀子教授）	2F
13		トルコ文化人類学研究調査の記録映像 （1992年6月～1993年6月）	静止画像	—	—	一部抜粋	個人蔵 （提供：中山紀子教授）	2F

◎ その他：館内図書コーナーにおけるトルコ文化関連書籍紹介（体験実習室）

- ・トルコの歴史（抜粋年表）
- ・トルコ料理について
- ・トルコと日本の友好の歴史について（エルトゥールル号遭難事件と1985年のトルコ航空支援）

2024秋季企画展

「江戸の牡丹ブームと芭蕉」

会場： 民族資料博物館 シルクロード室、附属三浦記念図書館1階エントランス

期間： 2024年10月15日（火）～12月20日（金）

内容： 2024年度秋季企画展では、近世文学研究者が収集した貴重な古典籍コレクションから、江戸時代の俳聖、松尾芭蕉に関連する資料を紹介した。松尾芭蕉が伊勢津藩主家の依頼により門人のネットワークを通じて牡丹の花弁収集に関与したとする史料に着目し、関連の古典籍資料や絵図を紹介。主な展示資料は、中部大学人文学部の岡本聡教授所有の古典籍を中心とするコレクション（通称「岡本文庫」）をもとにした。その他、中部大学日本伝統文化推進プロジェクトの関連活動において学生らが制作した「連句」を作る流れを説明する動画を会場内で放映した。会期中には、関連テーマの講演、ギャラリートークを開催。

出品： 28点

主催： 中部大学民族資料博物館

企画協力・学術監修：

岡本 聡 中部大学 人文学部教授

協力： 中部大学日本伝統文化推進プロジェクト

入館： 1,284人

日本の俳聖、松尾芭蕉（1644－1694／正保元～元禄7）が、江戸から東北、北陸、美濃（現在の岐阜県大垣市）を旅して紀行文『おくのほそ道』を著したことはよく知られている。この旅の後、元禄四年に、芭蕉は、伊勢津藩主藤堂高久の侍大将である藤堂良長から「茂庵」「くらはし」「なびか」という最高級の「牡丹」品種の収集を依頼された。これを芭蕉は門人去来のネットワークを活用して最終的には使命を果たしたことが、去来宛ての書簡から窺える。元禄・宝永年間の日本では、唐の時代に匹敵するほどの空前の鑑賞用「牡丹」のブームが巻き起こっていた。芭蕉は今回展示した『花壇地錦抄』に見られる四百九十四種類の牡丹の品種の中で最高級の牡丹の三品種を手に入れるようにという、かなり難しい依頼を受けていた訳である。芭蕉は弟子の去来に依頼し、去来は、兄である向井元端にそれを託した。去来は『去来抄』という書物の中に芭蕉の俳論を残すほど、芭蕉に信頼された弟子の内の一人である。しかし、その父や兄は、日本の本草学史上極めて重要人物である事も知られている。去来の父向井元升は、幕府の依頼で長崎に赴いて、日本で初めて西洋医学を取り入れ、御水尾院の侍医となった人物であり、兄向井元端は、一条政所家の侍医でありながら、後水尾院の跡を継いだ靈元天皇に極めて近い人物であった。靈元天皇の『乙夜随筆』には、「元端物語」として「中風」など病気に関する発言が十カ所に渡って確認でき、本草学者として靈元院の牡丹栽培にも関わっていた可能性もある。靈元天皇の牡丹好きは後の神沢杜口の随筆『翁草』でも語られているほど有名であり、去来を通してこの元端に頼む事は極めて正しい選択だったのである。牡丹は鑑賞用であるとともに医療用として用いられたのであるから、芭蕉が去来に依頼した事は正鵠を射ていたのである。本展示では、この「芭蕉」と「牡丹」の関係性に着目し、江戸時代の「流行」を通して、芭蕉やその門人たちの活発な活動の様子を描き出した。主な展示資料は、元中部大学人文学部教授の岡本勝（1938－2007）の古典籍コレクション（通称「岡本文庫」）を中心とした、俳諧に関する書籍や軸物である。会場では、江戸時代の版本をご覧いただくとともに、人文学部の岡本聡研究室に所属する学生たちが制作した、俳諧の「連句」の解釈を紹介するアニメーション映像も放映した。この度の企画では、大学院生や学生の助けを借りて、中学校の時の後輩であり、弟の友人でもある中野智章館長が全面的にバックアップして、暖かい巻頭の言葉も書いて下さった。また学芸員の方々にも非常にお世話になった。このような手作り感あふれる展示はこれを見た人々の心にも残ったものと考えている。中野館長は今後もこれをきっかけとして、さまざまな分野の先生方の展示を打診しておられ、今後中部大学の知の発信におおいに役立つものと考えている。（岡本）

中部大学

江戸の牡丹ブームと芭蕉

2024 中部大学民族資料博物館 秋季企画展

会期／2024年
10月15日(火)～
12月20日(金)
平日9時30分～16時30分(入場無料) ※施設閉館の30分前まで

主催／中部大学民族資料博物館
企画協力・学術監修／岡本 聡(中部大学 人文学部教授)
協力／中部大学日本伝統文化推進プロジェクト
会場／中部大学民族資料博物館(附属三浦記念図書館2階)

関連催事

① 講演「江戸の牡丹ブームと芭蕉」
講師—岡本 聡(中部大学 人文学部教授)
司会—中野 智章(中部大学民族資料博物館 館長/国際関係学部長・教授)
日時—10月25日(金) 14時より
会場—多目的室(中部大学民族資料博物館 内) ※事前申込不要
※車での来校を希望される場合は事前に下記までご連絡をお願いします。

② ギャラリートーク
中部大学大学院国際人間学研究科/梶木 宏成さん(人文学部 岡本研究室所属)
日時—11月8日(金) 11時15分より
会場—企画展会場内 ※事前申込不要

中部大学民族資料博物館
MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

【開館時間】9:30～16:30(入場は閉館の30分前) 【入場料】無料
【休館日】土曜・日曜・祝日・年末年始・大学が定める休日(行事開催日は開館予定)

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200 TEL.0568-51-9193 FAX.0568-51-9194 E-mail minzoku@office.chubu.ac.jp <https://www.chubu.ac.jp/student-life/facilities/museum/>

LINE UP

展示概要

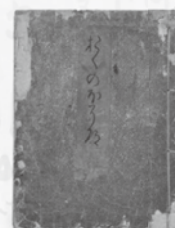
目

本の俳聖、松尾芭蕉（1644-1694）が、江戸から東北、北陸、美濃（現在の岐阜県大垣市）を旅して紀行文「おくのほそ道」を記したことはよく知られていますが、そうした吟行の旅路は、当時の「もの」や「情報」の収集にも大きく貢献していました。元禄年間の日本では、唐の時代に匹敵するほどの空前の鑑賞用の「牡丹」ブームが巻き起こりました。「おくのほそ道」の旅の後、芭蕉は、伊勢津藩主の一族にあたる藤堂良長（江戸中期の武士・俳人・俳号「探丸」）から「茂庵」「くらはし」「なびか」という最高級の「牡丹」品種の収集を依頼され、自身の門人のネットワークを活用して使命を果たしたことが弟子たちに宛てた書簡からうかがえます。本展示では、この「芭蕉」と「牡丹」の関係性に新たに着目し、江戸時代の「流行」を通して、芭蕉やその門人たちの活発な活動の様子を描き出します。

主な展示資料は、元中部大学人文学部教授の岡本勝（1938-2007）の古典籍コレクション（通称「岡本文庫」）を中心とした、俳諧に関する書簡や書籍です。会場では、江戸時代の版本をご覧いただくとともに、人文学部の岡本聡研究室に所属する学生たちが制作した、俳諧の「連句」作りの仕組みを紹介するアニメーション映像も放映します。



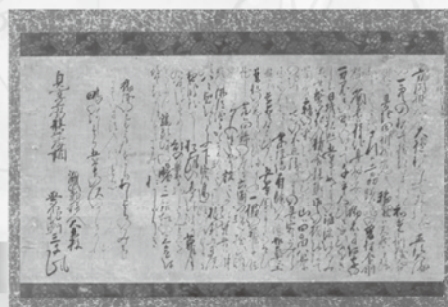
其角堂永機筆 歌人等肖像画



『おくのほそ道』（元禄版本）

「岡本文庫」について

「岡本文庫」は、岡本聡（中部大学人文学部教授の父、岡本勝（1938-2007））「近世俳諧・愛知教育大学名誉教授・元中部大学人文学部教授が収集した、2000点を超える近世文学関連の古典籍からなるコレクションです。岡本勝は「芭蕉西鶴とその周辺」が自身の研究のテリトリと公言し、本居宣長（1731-1801）や国学を対象とする「鈴屋学会」の設立にも携わったことから、俳諧や浮世草子、国学の蔵書が多く含まれます。また、三重県松阪市射和の地蔵尊船内から初期上方版子と絵本（松阪市重要文化財指定）を発見したことや、大蔵書家、横山重（1896-1980）中世国文学者の薫陶を受けたことも、幅広いジャンルからなるコレクションの形成につながっています。



三千風筆「御仏の」和歌懐紙

展示会場では、俳諧の「連句」作りの仕組みを紹介する動画を放映します！

テーマ「連句って何だろう？」

制作：中部大学人文学部・岡本 聡研究室
制作協力／中部大学日本伝統文化推進プロジェクト
井上徳之（中部大学 超伝導・持続可能エネルギー研究センター長 教授）

芭蕉七部集『猿蓑』所収の「市中は」歌仙（「歌仙」：連歌、俳諧の形式。長句と短句を交互に36句続けたもの）からとり、動画制作ツールを用いて、言葉が順に連なっていく様子を解説付きのアニメーション映像に仕上げました。（会場では、版本『猿蓑』（個人蔵）も展示）



中部大学民族資料博物館

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地（附属三浦記念図書館2階）
TEL 0568-51-9193 FAX 0568-51-9194
ホームページ <https://www.chubu.ac.jp/student-life/facilities/museum/> E-mail minzoku@office.chubu.ac.jp

ACCESS

交通のご案内／
JR中央線「神領」駅下車、
名鉄バス「中部大学前」
（約10分）下車すぐ



2024年度 秋季企画展 主要出品リスト

2024中部大学民族資料博物館 秋季企画展
「江戸の牡丹ブームと芭蕉」主要出品資料一覧

主催：中部大学民族資料博物館
企画協力・学術監修：岡本 聡 中部大学人文学部教授
協力：日本伝統文化推進プロジェクト
会期：2024年10月15日(火)～12月20日(金) 会場：中部大学民族資料博物館

No.	制作者・編者	資料名	成立・刊行年	寸法(cm)	形状	所蔵先
Ⅰ章：俳諧師 芭蕉の誕生						
1	其角堂永機筆	《歌人等肖像》	制作年不詳	55.3×140.7(本紙)	軸装	※
2	其角堂永機筆	《三十六歌人肖像》	制作年不詳	29.7×848.5	卷子装	※
3	油煙斎貞柳編	『狂歌五十人一首』	享保6年(1731)	26.2×18.8	書籍	※
4	大淀三千風筆	《「御仏の」和歌懷紙》	貞享2年(1685)か	29.8×56.2(本紙)	軸装	※
5	大淀三千風	『日本行脚文集』	元禄3年(1690)	19.0×26.5	書籍	※
—	(参考パネル) 小川破笠筆	《芭蕉翁肖像》 原資料：公益財団法人芭蕉翁顕彰会蔵	延享元年(1744)	84.5×31.7	—	—
—	蝶夢編・狩野正栄画	『芭蕉翁繪詞傳』(一部抜粋) 原資料：愛知教育大学附属図書館蔵	寛政5年(1793)	—	—	—
6	(複製印刷) 松尾芭蕉著・素龍跋	『おくのほそ道』(西村本) (復刻日本文学館「奥の細道 素龍清書本」監修・編集 日本古典文学会、1972製作) 原資料：個人蔵	元禄7年(1694)	16.7×14.2	書籍	※
Ⅱ章：芭蕉の旅						
7	松尾芭蕉著・風国編	『泊船集』	元禄11年(1698)	22.5×16.0	書籍	※
8	秋里籬島編・ 竹原春泉斎ほか画	『東海道名所図会』	寛政9年(1797)	25.8×18.5	書籍	※
—	(参考パネル) 中川濁子	《甲子吟行繪卷》(熱田の宿の場面) 原資料：公益財団法人三康文化研究所附属三康図書館蔵	刊行年未詳	—	—	—
9	松尾芭蕉	『おくのほそ道』(元禄版本)	元禄15年(1702)	18.6×14.0	書籍	※
10	松尾芭蕉	『芭蕉翁奥羽之紀行』(寛政版本)	寛政元年(1788)	21.5×15.5	書籍	※
11	簑笠庵梨一編	『奥細道菅菰抄』上	安永7年(1778)	23.0×16.0	書籍	※
12	(複製印刷) 与謝蕪村筆	《奥の細道図》上下巻(奥の細道図巻) 原資料：公益財団法人阪急文化財団 逸翁美術館蔵・ 重要文化財	安永8年(1779)	上巻：16.0×440.0 下巻：16.0×592.0	卷子装	※
—	(参考パネル) 松尾芭蕉書の書簡	「中尾源左衛門(槐市)・浜市右衛門(式之) 宛芭蕉書簡」(一部抜粋) 原資料：公益財団法人芭蕉翁顕彰会蔵	元禄4年(1691) 9月23日付	—	—	—
Ⅲ章：芭蕉と牡丹の関係						
13	鳥飼洞斎編	『改正月令博物筌』四月部	文化元年(1804)	8.5×18.6	書籍	個人蔵
14	山本荷兮編・松尾芭蕉序	『阿羅野』上	元禄2年(1689)序	22.4×16.0	書籍	※
15	水野元勝編	『花壇綱目』下	寛文年間稿	22.8×16.0	書籍	※
16	伊藤伊兵衛(四世)	『増補地錦抄』巻十二	宝永7年(1710)	16.0×11.0	書籍	※
—	(参考パネル) 松尾芭蕉書の書簡	「中尾源左衛門(槐市)・浜市右衛門(式之) 宛芭蕉書簡」(一部抜粋) 原資料：公益財団法人芭蕉翁顕彰会蔵	元禄4年(1691) 9月23日付	—	—	—
17	八椿舎康工編	『俳諧百一集』	宝暦14年(1764)序	27.2×18.6	書籍	※
18	向井去来	『去来抄』	宝永元年(1704)頃	22.5×16.0	書籍	※

2024年度 秋季企画展 主要出品リスト

Ⅳ章：芭蕉の弟子たち						
—	(参考パネル) 松尾芭蕉書の書簡	「中尾源左衛門(槐市)・浜市右衛門(式之)宛芭蕉書簡」(一部抜粋) 原資料：公益財団法人芭蕉翁顕彰会蔵	元禄4年(1691)9月23日付	—	—	—
19	秋里籬島編・西村中和画	『木曾路名所図会』巻三	文化元年(1804)序	25.5×18.0	書籍	※
20	天野桃隣編	『陸奥衡』	元禄10年(1697)跋	22.8×16.4	書籍	※
—	(参考パネル) 渡辺華山筆	《支考肖像真蹟／華山圖畫》 原資料：早稲田大学図書館蔵	制作年不明	—	—	—
21	各務支考編	『俳諧十論』	享保4年(1719)跋	27.0×18.5	書籍	※
22	宝井其角編	『雑談集』	元禄4年(1691)	22.5×16.2	書籍	※
23	与謝蕪村編	『俳仙三十六人一首』(寛政版本＝上方版)	寛政11年(1799)	28.8×19.7	書籍	※
24	与謝蕪村編	『蕪村三十六歌仙』(文政版本＝江戸版)	文政11年(1828)	29.5×21.0	書籍	※
25	(参考出品) 小嶋宗賢・鈴村信房著 『源氏鬘鏡』の改題本	《源氏物語繪抄》	天和3年(1683)刊	23.1×16.7	書籍	※
関連資料						
26	(学生による関連研究制作)	「連句ってなんだろう？」 制作：中部大学 人文学部 岡本聡研究室／伊集盛礼、刀根宏太、百武孔、阿部健心 制作協力：中部大学日本伝統文化推進プロジェクト 井上徳之 中部大学 超伝導・持続可能エネルギーセンター長 教授			映像資料	—
27	向井去来・野沢凡兆編	『猿蓑』(芭蕉七部集)	寛政7年版力	22.5×15.5	書籍	個人蔵
※：岡本文庫蔵						
岡本 勝先生関連						
文化財調査時の調書原稿[岡本 勝の自筆原稿](写し)						
岡本 勝の愛用カメラと文具						
学校校歌(岡本 勝による作詞) 岡本 勝は、愛知、三重の近隣の学校校歌等の作詞を複数手掛けている。						
書籍・岡本勝(編)『万の文反古』桜楓社、1976年。 *岡本勝『「奥の細道」物語』東京堂出版、1998年。＜図書館2F/和図書9/915.5/O 42＞ *岡本勝『子ども絵本の誕生』弘文堂、1988年。＜図書館2F/和図書9/913.57/O 42＞ *岡本勝他『松阪学ことはじめ』おうふう、2002年。＜図書館2F/和図書2/215.6/N 96＞ ・本居宣長記念館『本居宣長事典』東京堂出版2001年。 ・岡本勝他(編)『近世文学研究事典』桜楓社、1986年。 ・岡本勝『大淀三千風研究』おうふう、1971年。 ・岡本勝『近世俳壇史新攷』桜楓社、1988年。 *岡本勝『近世文学論叢』おうふう、2009年。＜図書館2F/和図書9/910.25/O 42＞ *岡本勝『俳文学こぼれ話』おうふう、2008年。＜図書館2F/和図書9/911.304/O 42＞						
その他(参考書籍)						
*山根 有三著『光悦・宗達・光琳』講談社 1977年。＜中部大学民族資料博物館蔵書＞ *山川 武編『琳派：光悦/宗達/光琳』学習研究社 1979年。＜中部大学民族資料博物館蔵書＞ ・徳川美術館・蓬左文庫会館75周年記念 春季特別展『王者の華 牡丹』徳川美術館 2010年。						
参考文献						
・白石悌三ほか校注『芭蕉七部集』岩波書店、1990年。 ・田中善信『全釈芭蕉書簡集』新典社、2005年。 ・今栄蔵『芭蕉書簡大成』角川学芸出版、2005年。 ・国文学研究資料館 国書データベース https://kokusho.nijl.ac.jp/?ln=ja *日本古典文学大辞典編集委員会『日本古典文学大辞典』岩波書店、1983年。＜図書館1F参考/ 910.3/N 77/1-5＞ ・加藤楸邨ほか監修『俳文学大辞典』角川書店、1995年。 ・今栄蔵『芭蕉年譜大成』角川書店、1994年。 *岡本聡『芭蕉忍者説再考』中部大学、2018年。＜図書館2F和図書9/ 911.32/O 42、図書館1F 教員著作/ 911.32/O 42＞ *中森康之『芭蕉の正統を継ぎしもの 支考と美濃派の研究』ペリかん社、2018年。＜図書館2F/和図書9/ 911.33/Ka 16n＞ ・佐藤勝明監修『蕉風俳諧の伝道師 支考』大垣市・大垣市教育委員会、2020年。 *佐藤勝明『21世紀日本文学史ガイドブック5』ひつじ書房、2011年。＜図書館2F/和図書9/911.32/Sa 85＞ ・朝日町歴史博物館(監修)『俳文学の世界展(平成25年度企画展)』朝日町歴史博物館、2013年。 ・芭蕉記念館『芭蕉～四季を旅する～令和2年度 第74回芭蕉祭特別展図録』三重県伊賀市、2020年。						
*は本学付属三浦記念図書館の蔵書を示す ＜書架の配置階と請求記号＞を参照。						

特別講座＜古典絵画＞

2023年度・2024年度受講生作品展

—— 風炉先屏風に描く

- 会場： 民族資料博物館 シルクロード室、附属三浦記念図書館 1 階エントランス
- 期間： 2025年 3月21日（金）～ 5月30日（金）
（会期中に指導講師による講評会を実施：2025年 5月 28日）
- 内容： 当館企画の日本画実技制作講座を受講した一般参加者の成果発表として、2023年度から2024年度までに制作した作品を展示。
課題制作は「風炉先屏風」で、他に自由制作作品を合わせて発表。
- 出品： 2023年度・2024年度受講生11人 計21点
（指導講師による賛助出品を含む）
- 賛助出品： 下川 辰彦 画家・日本美術院特待・中部大学民族資料博物館 外部専門委員 1点
渡邊 美喜 画家・日本美術院特待 1点
- 担当： 下川 辰彦・原田 千夏子
- 入館： 863人

特別講座(古典絵画)は、当館の地域への教育普及活動の一環として行っている、一般対象の日本画実技制作の連続公開講座で、日本画実技制作を通じて、古典絵画の材料や伝統技法を学ぶという内容となっている。毎回、指導講師により課題制作のテーマが提案されることになっており、2023年度と2024年度は、茶室で用いる風炉先屏風の作品制作であった。今回の展示は、その下図作りから2年間にわたり制作した作品成果を報告するはこびとなった。指導講師により、受講生の進行に応じて、それぞれの個性を活かしながら感性を引き出すよう様々な工夫がされてきたなかで、受講生各自も、制作に対する真な姿勢と熱意で完成させた力作が集まる展示となった。（原田）



特別講座「古典絵画」受講生作品展
民族資料博物館入館案内および賛助出品作品の展示
（附属三浦記念図書館 1 階）



特別講座「古典絵画」受講生作品展 展示会場



中部大学

中部大学民族資料博物館企画



2023年度・2024年度 特別講座

「古典絵画」受講生作品展

— 風炉先屏風に描く —

2025.3.21[金]—5.30[金]

中部大学民族資料博物館
シルクロード室他

*大学行事につき、3.22(土) [~12:00]、3.29(土) [~13:30]は特別開館

*5/28(水) 10:00より会場で指導講師による講評会を行います
[指導講師：下川 辰彦（日本美術院特待）]

デザイン参考：英一雄『南蛮図屏風』江戸時代、19世紀（部分）、東京国立博物館蔵 <https://webarchives.tnm.jp/>（東京国立博物館 研究総務アーカイブス）*作品を抜粋、加工しています。本展への出品作品ではありません。

中部大学民族資料博物館
MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

【開館時間】9:30~16:30（入場は閉館の30分前まで）【休館日】土曜・日曜・祝日・年末年始・大学が定める休日
【入場料】無料 ※行事開催日は開館予定 <https://www.chubu.ac.jp/student-life/facilities/museum/>
愛知県春日井市松本町1200 TEL.0568-51-9193 E-mail chubu-minzoku@fsc.chubu.ac.jp

2023年度・2024年度 特別講座

「古典絵画」

入場無料

受講生作品展

— 風炉先屏風に描く

2025.3.21[金]—5.30[金]

中部大学民族資料博物館 シルクロード室他

開館時間：平日9時30分～16時30分（入場は閉館の30分前まで）

*大学催事につき、3.22(土)〔～12:00〕、3.29(土)〔～13:30〕は特別開館

*5/28(水)10:00より会場で指導講師による講評会を行います

[指導講師：下川 辰彦（日本美術院特待）]

中部大学民族資料博物館の特別講座「古典絵画」は、
日本画の実技制作を通じて古典絵画の
材料や伝統技法を学びながら、
現代作品の制作をすすめる連続講座です。
大学博物館より地域の皆様へ生涯学習の場を
提案する試みを継続して行っています。
2023年度から2024年度の課題テーマは、
茶室で用いる風炉先屏風作品の制作に挑戦しました。
2年間にわたる制作活動の成果をご報告いたします。
（指導講師による作品の賛助出品も予定します。）



中部大学民族資料博物館 〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200 TEL.0568-51-9193 FAX.0568-51-9194
E-mail chubu-minzoku@fsc.chubu.ac.jp <https://www.chubu.ac.jp/student-life/facilities/museum/>

特別講座〈古典絵画〉2023年度・2024年度受講生作品展 出展作品リスト

2024中部大学民族資料博物館企画展

「特別講座（古典絵画）2023-2024年度受講生作品展—風炉先屏風に描く」作品一覧

主催：中部大学民族資料博物館

会期：2025年3月21日（金）～5月30日（金） 中部大学民族資料博物館 シルクロード室
中部大学附属三浦記念図書館1階エントランス展示

No.	制作者氏名	題 目	寸 法(cm)	材	形 状
1	石川 美知子	藤波	88.5 × 86.0	紙本	二曲屏風 一隻
2		深緑	41.0 × 53.0	紙本	額装
3	加藤 あずさ	(模写)俵屋宗達『風神・雷神』(反転)	88.5 × 86.0	紙本	二曲屏風 一隻
4		(模写)俵屋宗達『風神・雷神』(小下図)	50.6 × 66.0	紙本	額装
5	小島 亜弥子	遠境幻相	88.5 × 86.0	紙本	二曲屏風 一隻
6	笹尾 純子	甲津原	88.5 × 86.0	紙本	二曲屏風 一隻
7		花眼(かげん)	61.0 × 72.8	紙本	額装
8	園部 五十子	秋宵	43.0 × 177.0	紙本	二曲屏風 一隻
9		秋草	27.0 × 45.5	紙本	額装
10	田中 佐保子	遷宮温故屏風	43.0 × 177.0	紙本	二曲屏風 一隻
11	原田 由己	爽風	43.0 × 177.0	紙本	二曲屏風 一隻
12		来迎	45.5 × 38.0 (F8)	紙本	額装
13	牧 節子	(模写)長谷川久蔵『桜図』	43.0 × 177.0	紙本	二曲屏風 一隻
14		花明り	38.0 × 45.5	紙本	額装
15	松原 久代	富士 四季図	43.0 × 177.0	紙本	二曲屏風 一隻
16		紅富士	45.5 × 38.0 (8号)	紙本	額装
17	三田 眞幸	嫌われものの遊び	88.5 × 86.0	紙本	二曲屏風 一隻
18	宮澤 好子	祇園祭り	43.0 × 177.0	紙本	二曲屏風 一隻
19		山鉾巡行	38.0 × 45.5	紙本	額装

指導講師賛助出品

20	渡邊 美喜 (2022年度指導講師)	花暦(はなごよみ)	43.0 × 177.0	紙本	二曲屏風 一隻
21	下川 辰彦	黎明(れいめい)～春の夜明け	86.5 × 174.0	紙本	四曲屏風 一隻

講演

2024 年度秋季企画展関連

「元禄の牡丹ブームと芭蕉」

会場： 民族資料博物館 多目的室
期日： 2024年10月25日（金）14：00～16：00
講師： 岡本 聡 中部大学人文学部教授
司会： 中野 智章 中部大学民族資料博物館長
[映像撮影] 野寄 誠 学校法人中部大学 学園広報
部制作課 担当課長 *当時
中村 正男 中部大学 学事部担当部長
原田 千夏子 中部大学民族資料博物館
内容： 秋季企画展の学術監修者、および主要出品資料
の所蔵者による講演。
企画： 中野 智章、大場 裕一、中村 正男、原田 千夏子
参加： 44人
記録： 本講演は『講演記録2024』8頁以下に記載。

秋季企画展「江戸の牡丹ブームと芭蕉」展において、江戸時代の古典籍を中心とした貴重な展示資料の提供、および展示学術監修を担当いただいた岡本聡教授を講師にお招きし、企画展のテーマについて資料を用いてより詳しく解説いただく機会として、民族資料博物館では講演会を企画開催した。近世文学研究を専門とされる岡本教授は、江戸時代の俳聖松尾芭蕉の手によるいくつかの書簡に着目され、そこに当時流行した牡丹ブームを背景とした大名家の活動の実態を読み取る試みをされた。それは、芭蕉が津藩主家の依頼を受け、希少種の牡丹入手するために、門人ネットワークを駆使して奔走した様子を資料が物語っているという内容である。元禄宝永という平和な時世の訪れのなかで生まれていた武家と文化人たちの結びつきをより具体的にイメージすることができた新たな観点として、聴衆の関心を大いに引くこととなった。講演の後には、質疑応答とともに展示会場にて、岡本教授により、一つひとつの展示資料の紹介も丁寧にしていただき、参加者等にとってはじっくりと鑑賞することのできる充実した時間となった。なお、本展の展示資料は、岡本教授の父君の岡本勝先生（元中部大学教授・愛知教育大学名誉教授）の収集された「岡本文庫」蔵から数多く出品いただいたことから、展示会場の一角で岡本勝先生の主著や記念資料を一部紹介した。（原田）



2024年秋季企画展関連講演会の様子
2024年10月25日（講師：岡本教授）



秋季企画展関連講演後の質疑応答の様子
（後列右・副館長、奥・館長）

ギャラリートーク

2024年度秋季企画展関連 ギャラリートーク

会場： 民族資料博物館 シルクロード室
期間： 2024年11月8日（金）
司会： 大場 裕一 中部大学民族資料博物館副館長
（応用生物学部教授）
解説： 岡本 聡 中部大学人文学部教授
： 樗木 宏成 中部大学大学院国際人間学研究科博士
後期課程3年（人文学部岡本研究室所属）※当時
内容： 秋季企画展の展示解説を作成した学術監修者の
岡本聡・人文学部教授研究室による作品解説。
企画： 中野 智章、大場 裕一、中村 正男、原田 千夏子
参加： 22人

秋季企画展「江戸の牡丹ブームと芭蕉」展の資料解説には、岡本聡人文学部教授の研究室所属の学生たちが手分けして文献調査をして作成した。このことから、研究室を代表して、俳諧文学を勉強している大学院生により企画展内容を一般に向けて紹介する機会として、民族資料博物館では学生によるギャラリートークを企画開催した。当日は、図録にもとづき四章からなる展示構成の順で古典籍資料の概要説明が行われた。参加者には俳諧に造詣が深い方々もおられ、会場内で教員と学生に感想や質問などを通じて、企画展テーマを軸にした交流のひとつを過ごしていただいた。（原田）



2024年秋季企画展ギャラリートークの様子
2024年11月8日（解説者：樗木 宏成）

2024年度特別講座＜古典絵画＞

――屏風作品制作 (風炉先屏風制作2年目)

会場： 中部大学10号館106Jゼミ室
期間： 2024年4月17日(水)～2025年1月15日(水)
講師： 下川 辰彦 画家・日本美術院特待・中部大学民族
資料博物館外部専門委員
担当： 原田 千夏子 中部大学民族資料博物館
受講： 12人(学外一般参加者＝受講料有料・定員制・通年)

特別講座(古典絵画)では、日本画の実技制作について、さまざまな基底材による日本絵画を制作することをテーマに始め、これまでに絹絵、板絵、古画の模写、箋紙、短冊、屏風の小下図等を課題に取り上げてきた。2023年度は、屏風のなかでも茶室に用いる「風炉先屏風」を2年間かけて制作することにした。2枚の作品を左右に連結して広げて室内に設置する定番の型式であるものの、本講座では、作品の向きについては横型、または縦型のいずれでもよいということとし、画面の構造を作品世界の表現に活かすことも念頭におきながら、どのような構成をとるか、各自が趣向を凝らして工夫できるように設定した。モチーフを伝統的なものとするか、または自身の独創性を求めるか、さまざまな考え方で作品に向き合うことが個々の意欲的な制作につながると考えている。

今回の屏風制作は、これまでのような個々の習作と異なり、所定の屏風と同じ作りのものに描くことになり、比較的大きなサイズを取り扱うことから、博物館側と相談し、教室における収容人数も限られることや、一回の講座内で指導に要する時間的な面から、開講するにあたっては、ある程度の経験を持つ方に人数を限定して募集することとなったことは、ご理解をいただければ幸いである。受講いただいた方には、下地作りの段階から、特別な地塗りや箔の方法を駆使するなど、集中力の要る工程を重ねる点で根気強さを保持いただくことをお願いしつつ、日本絵画の特有の材による表現の美しさに通じる過程としてぜひ紹介していきたいと思っている。

(下川)

2023年度～2024年度特別講座(古典絵画) アンケート集計 アンケート回収 11名

アンケート前文「このたびは、特別講座を受講いただきまして誠にありがとうございました。皆様の声を今後の参考にさせていただきたくしますので、以下のアンケートにご協力をお願い申し上げます。」

1 講座全体について感想をおきかせください。

- | | |
|----------------|-----|
| ① 大変関心を深めた | 10名 |
| ② 普通 | 1名 |
| ③ あまり関心が持てなかった | 0名 |

2 講座内容でどのような点に関心を持ちましたか、具体的に教えてください。

- ・ 屏風に(古典絵画の)風神雷神(図)をどのように解釈して模写することができるか?
- ・ 大下図を作成してから、作品を描いていく工程を初めて経験しました。しっかりとした構図を考えること、色調のバランス、作品全体を見ながら描いていくことなど大変勉強になりました。
- ・ 屏風として構図を考える点。
- ・ 時間をかけて丁寧に描くということ。
- ・ 水晶末の使い方。
- ・ 箔の使い方などとても参考になりました。
- ・ 大きな作品は初めてのことで大変でしたが、先生のご指導のおかげで完成できました。ありがとうございました。
- ・ はじめて屏風に描くということで緊張しましたが、丁寧な指導により、なんとか完成することができました。烏の子の紙はとてもむずかしかったですが、それも練習できて良かったです。
- ・ 屏風を小下図、大下図、本画の各作成をしていく手順を本格的に学ぶことができ勉強になった。
- ・ 自分とは違う見方、表現の仕方に関心を深めました。

3 講師の指導について、いかがでしたか。

- | | |
|---------|-----|
| ① 満足した | 11名 |
| ② 普通 | 0名 |
| ③ いまひとつ | 0名 |

4 講師のどのような指導が良いと思われましたか。

- ・ (古典絵画の)模写の難しさを心配していましたが、先生の御指導を受けて描けば(大丈夫)と思い最後まで頑張る気になりました。
- ・ どの色を使うと作品が生きるのか、余分な色をどのようにしておさえていくのか考えながら作品を作り出していくことの大切さに気がきました。

- ・ 白の胡粉の使い方。
- ・ 各個人にそったご指導。
- ・ 高度な技術も基礎も丁寧に教えていただきました。
- ・ 刷毛と水のテクニックが真似できないけれど、とてもすごいです。
- ・ 各個人に合う指導してくださり、いつも感謝しております。
- ・ ひとりひとり全く異なる絵を描いているのですが、それに応じて丁寧に指導していただきます。本当に感謝しかありません。
- ・ 2年間にわたる制作期間に、手を抜くことなく丁寧に教えてもらえたことがありがたかった。
- ・ 考え方、表現の仕方に新しい発見を得て学ぶことができた。

5 事務的な連絡手続き等で、困った点やお気づきの点がありましたら教えてください。

- ・ 連絡をこまめにしてもらい困ったことは特にありませんでした。
- ・ いつもありがとうございました。
- ・ いつも有難うございます。
- ・ 満足しています。
- ・ 特にありません。
- ・ 何度か連絡のためお電話もいただいて申し訳ないと思っています。
- ・ 親切に連絡などいただきありがとうございます。

6 今後、これに類した講座を開催する場合、受講を希望しますか。

- | | |
|---------|-----|
| ① 受講する | 11名 |
| ② わからない | 0名 |
| ③ 受講しない | 0名 |

7 今後、希望される講座内容や、また改善を望まれる点など当館へのご意見・ご要望をお聞かせください。

- ・ 自由画作品を描きたいです。
- ・ 個人的には絹絵をもう少し描いてみたいです。
- ・ 講座が開かれれば、受講したいと思います。
- ・ 新しいマチエールについてなど。



特別講座の指導風景
(右・指導講師 下川辰彦氏)



特別講座の指導風景 (左・指導講師)
(制作の過程で画面全体の構図や配色を見直す時間)

開館日数・入館者数

2024年度の開館日数は、187日、入館者数の合計は4,554名である。この他、学内の別会場における催事（半期で開催する特別講座：春学期13回、秋学期13回延べ312人）の参加者数をあわせると、当館の2024年度の催事参加者は合計で延べ4,866人となる。前年の2023年度は、感染症対策方針の緩和にともない、展示室は5月より一般

を含む通常開館のかたちに戻すこととなったものの、特に学校見学による団体見学の来館者数は例年ペースまでにいたらなかった。それに比べ、2024年度の入館者数はコロナ対策前に近い値となったことから、通常の社会生活が戻りつつあることをあらためて実感させられた。

月	2024年度			(参考：2023年度)	
	開館日数	入館者数	備 考（主な出来事・行事）	開館日数	入館者数
4月	21	320	入学式（1日）、高校による大学見学（1件）	21	236
5月	20	524	高校による大学見学（6件）	21	205
6月	22	844	常設展示室内コーナー展示（6/2～7/1）、初夏のオープンキャンパス（2日）、父母との集い（8日、22日）、高校による大学見学（4件）	24	233
7月	23	279	高校による大学見学（5件）、グループ見学（1件）	21	189
8月	6	530	夏のオープンキャンパス（2～4日）、小学校による大学見学（1件）、グループ見学（2件）	8	372
9月	6	201	秋のオープンキャンパス（29日）、高校による大学見学（1件）	8	105
10月	22	943	秋季企画展（10/15～12/20）、秋季企画展関連講演（10/25）、高校による大学見学（9件）、中学校による大学見学（1件）、小学校による大学見学（1件）、グループ見学（1件）	20	560
11月	20	342	秋季企画展関連ギャラリートーク（8日）、CAAC連続講義内見学（15日）、高校による大学見学（4件）、学園関係者見学（3件）	22	468
12月	16	212	高校による大学見学（2件）、グループ見学（1件）	16	235
1月	19	100		18	199
2月	1	107	小学校による大学見学（1件）	0	0
3月	11	152	学位記授与式（22日）、春のオープンキャンパス（29日）、保育園園児見学（14日）、グループ見学（1件）	0	0
計	187	4,554	※長期休暇以外の臨時休館期間（4/4、5/27～28、6/19、8/5～7、8/16～9/20、10/8、10/11、12/24～26、2/1～3/20）	179	2,802

団体見学

2024年度 特別開館対応をした主な催事

総件数：15件（1,384人）（参考：2023年度 13件 663人）
内訳

- ・ 休日の特別開館 ： 7件 1,039人
- ・ 臨時休館中の特別開館： 8件 345人

休日の特別開館：

- | | |
|-------------------------|------|
| 1) 6月2日(日) 初夏のオープンキャンパス | 72人 |
| 2) 6月8日(土) 「父母との集い」 | 243人 |
| 3) 6月22日(土) 「父母との集い」 | 189人 |
| 4) 8月3日(土) ～ 5日(月) | |
| 夏オープンキャンパス | 338人 |
| (3日は通常開館) | |
| 5) 9月29日(日) 秋のオープンキャンパス | 135人 |
| 6) 3月22日(土) 学位記授与式 | 1人 |
| 7) 3月29日(土) 春のオープンキャンパス | 61人 |

臨時休館期間の特別開館：

- | | |
|----------------------------------|------|
| 1) 8月22日(木) 名鉄スマイルプラス
(学童保育所) | 138人 |
| 2) 8月23日(金) 愛知県春日井市県立学校長会 | 16人 |
| 3) 8月23日(金) 愛知県小中学校理科系教員 | 41人 |
| 4) 10月11日(金) 岐阜農林高等学校 | 22人 |
| 5) 10月11日(金) 聖隷クリストファー高等学校 | 7人 |
| 6) 2月7日(金) 春日井市立北城小学校 | 102人 |
| 7) 3月3日(月) 私立大学図書館協会 | 6人 |
| 8) 3月14日(金) 中部大学保育園ちゅとらのおうち | 13人 |

<授業利用>

- | | |
|---------------------------------------------|-----|
| 1) 5月3日(金) 国際関係学部 授業内見学 | 40人 |
| 2) 5月16日(木) 「博物館概論」 | 35人 |
| 3) 6月14日(金) 国際関係学部「国際基礎演習」 | 18人 |
| 4) 10月10日(木) 国際関係学部「国際基礎演習」 | 38人 |
| 5) 10月17日(木) 国際関係学部「国際基礎演習」 | 22人 |
| 6) 10月17日(木) 国際関係学部「国際専門演習」 | 10人 |
| 7) 11月15日(金) CAAC 講義
(中部大学アクティブアゲインカレッジ) | |
| 授業内見学 | 14人 |

- ・ 入館者数のうち、高校の大学施設見学受入件数は、32件、見学総数は合計827人となり、昨年度に比べ631人の増加となった。
- ・ 大学の新型感染症対策方針にもとづき、2020年7月より2024年3月まで、体験型の鑑賞コーナーは接触禁止の状態を継続していたが、緩和の見通しから、2024年度から解除し、民族衣装や民族楽器に触れる一角を復旧した。

2024年度 高校見学受入状況

受入件数 32件、合計人数 827人
(参考：2023年度 15件、計196人)

2024年度 その他のグループ見学等の受入状況

受入件数 9件、合計人数 332人
(参考：2023年度 10件、計263人)

<団体見学・交流等>

- | | |
|------------------------------|------|
| 1) 7月24日(水) 春日井市小中学校教員 | 32人 |
| 2) 10月16日(水) 名進研小学生 | 139人 |
| 3) 10月23日(水) 大治町立大治中学校 | 132人 |
| 4) 10月24日(木) 一般社団法人アフリカ協会 | 2人 |
| 5) 11月5日(火) 春日丘中学校姉妹校 | 8人 |
| 6) 11月21日(木) 学園関係者(経営情報学部)対応 | 2人 |
| 7) 11月21日(木) 学園関係者(応用生物学部)対応 | 4人 |
| 8) 11月26日(火) 学園関係者(学園幹部)対応 | 4人 |
| 9) 12月9日(月) 外部専門委員会 | 9人 |

出版

中部大学民族資料博物館『ニュースレター』19号、2024年6月、全10頁。

2024中部大学民族資料博物館秋季企画展『江戸の牡丹ブームと芭蕉』、2024年10月、全40頁。

『中部大学民族資料博物館 年報2023』、2024年10月、全58頁

『中部大学 キャンパス・アートマップ (2024改訂版)』2025年2月、全20頁。

2023/2024中部大学民族資料博物館企画『特別講座「古典絵画」2023年度・2024年度受講生作品展記録集—風炉先屏風に描く』、2025年3月、全64頁。

中部大学キャンパス・アートマップ (2024改訂版) 制作

本冊子は、2019年度の学校法人中部大学の創立80周年記念活動の折に制作した印刷物で、2023年度の理工学部新設にともない一部改訂した。主な内容は、春日井キャンパスのオープンスペースにある絵画や彫刻作品など美術工芸作品が設置されている場所や、植栽の美しい景観を紹介するもので、付録地図をみながら学内を散策する際に携帯しやすいよう、小型の作りとなっている。学内の学生や教職員のみならず、地域に対して本学のキャンパス景観をより広く知っていただく広報冊子の一助として、館内のほか、1号館受付において配布用に設置している。

映像記録

催事名 : 2024年常設展示室コーナー展示の「中部大学におけるトルコ文化人類学研究——中山紀子教授の調査と研究」

撮影日 : 2024年6月4日(火)

企画 : 中部大学民族資料博物館

撮影者 : 中部大学学事部 学事課

所要時間 : 40秒

中部大学公式X (@ChubuUniv) にて配信

URL : <https://x.com/ChubuUniv/status/1803940899874902155>

催事名 : 2024秋季企画展関連講演
「元禄の牡丹ブームと芭蕉」

撮影日 : 2024年10月24日(木)

企画 : 中部大学民族資料博物館

撮影者 : 学校法人中部大学学園広報部制作課
(記録: 中部大学民族資料博物館)

所要時間 : 65分

催事名 : 学校法人中部大学 保育所「ちゅとらのおうち」
園児らの中部大学民族資料博物館見学

撮影日 : 2025年3月14日(金)

企画 : 中部大学民族資料博物館

撮影者 : 中部大学学事部 学事課

所要時間 : 102秒

中部大学公式X (@ChubuUniv) にて配信

URL : <https://x.com/ChubuUniv/status/1917760887823241437>

中部大学
キャンパス・アートマップ

舞臺の精進記



不習寅門三遁掌平。番。1号路

建物と緑の共生するキャンパス

中部大学は、1962（昭和37）年に、春日井の地に中部工業短期大学を、1964（昭和39）年に中部工業大学を開学して以来、キャンパス全体に緑と建物が融合する緑の景観を作り続けている。

[illegible]

中部大学

CHUBU
UNIVERSITY
CAMPUS
ART MAP

CONTENTS

■ 中野大キヤンパス アート作品配置図	03
■ 文化施設 (三軒平田至「工芸館」)	03 ~ 04
■ 大学の歴史を彩る作家たち	05 ~ 06
■ 建築と庭、池泉と広場	07 ~ 08
■ 彫刻と絵画のあそび間	09 ~ 11
学部関連ゼミのアート	
■ 工学部	12
■ 国際関係学部	13
■ 応用生物学部	14
■ 生命健康科学部	15
■ 人文学部	16
■ 理工学部	17
■ 現代教育学部	18
■ 経営情報学部	19
■ キヤンパスの四季	20



《國立聖約翰(三浦平先生)遺木多惠示

創立者像を囲む空間では、「樹(かい)の本」が表を飾る(2005年撮影)。中国の孔子廟の版にならみ、日本では「字樹の本」といわれることから、学園の定式に付する行方が込められている。

[illegible]

田中 大輔 (1970)
 田中 大輔 (1970)
 田中 大輔 (1970)

III 長谷川 しのぶ

III 四神合村 5つの自然
村の風景と村の歴史
をのびのびと楽しみながら
訪れることが出来る。自然
の恵みと村の歴史を
楽しむことが出来る。

[illegible]

文化施設 (三浦幸平記念室/工法庵)

[illegible]

三浦幸平記念室 (三浦幸平メモリアルホール)

朝鮮軍と朝鮮兵 朝鮮警備隊は朝鮮軍と朝鮮兵からなる。前者は、朝鮮半島の南半部の朝鮮政府軍であり、後者は北半部の朝鮮人民軍である。朝鮮人民軍は、朝鮮労働党の指導下で活動している。朝鮮人民軍は、朝鮮半島の南半部を占領し、北半部を解放するのを目的としている。朝鮮人民軍は、朝鮮半島の南半部を占領し、北半部を解放するのを目的としている。



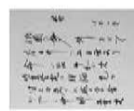
立礼式の要領「腰回し」

[illegible]

図 10 平の雪田地帯と田圃



2010年11月 10月25日



《中部大学校歌(自序)(部分)》(重)



《中國大學流產率圖(自譯)》, 作爲大學第二、三級出版第一年。

広報

取材——

中部大学放送研究会「chu-chu テレラジ」2024 年 6 月 14 日取材 (2024 年 7 月 3 日大学内インターネット放映、その他ケーブルテレビ放映)

中部大学放送研究会「chu-chu テレラジ」2024 年 8 月 3 日取材 (2024 年 9 月 25 日大学内インターネット放映、その他ケーブルテレビ放映)

中部大学放送研究会「chu-chu テレラジ」2024 年 11 月 8 日取材 (2024 年 11 月 20 日大学内インターネット放映、その他ケーブルテレビ放映)

「江戸の牡丹ブームと芭蕉展」、『中日新聞 くらしのニュース』2024 年 12 月 12 日掲載。

「民族資料 4,000 点を収録」、『教育学術新聞』2025 年 3 月 5 日掲載。

中部大学放送研究会「chu-chu テレラジ」2025 年 3 月 26 日取材 (2025 年 4 月 16 日大学内インターネット放映、その他ケーブルテレビ放映)

大学広報——

「民族資料博物館」、『中部大学 大学案内 2025』、54 頁。

「中部大学民族資料博物館」、『CAMPUS LIFE 2024』(デジタルブック)、55 頁。

「民族資料博物館企画『中部大学におけるトルコ文化人類学研究——中山紀子教授の調査と研究』」、『学校法人中部大学 学園報』第 596 号、2024 年 7 月 20 日、7 頁。

「2024 民族資料博物館秋季企画展『江戸の牡丹ブームと芭蕉』」、『学校法人中部大学 学園報』第 599 号、2024 年 11 月 20 日、5 頁。

「講演『元禄(江戸)の牡丹ブームと芭蕉』」、『学校法人中部大学 学園報』第 599 号、2024 年 11 月 20 日、5 頁。

「2024 民族資料博物館秋季企画展『江戸の牡丹ブームと芭蕉』ギャラリートーク」、『学校法人中部大学 学園報』600 号、2024 年 12 月 20 日、6 頁。

その他 (学外の催事案内) ——

『おでかけガイド 愛知の博物館 2024.04 ～ 2024.09』、愛知県博物館協会。

『おでかけガイド 愛知の博物館 2024.10 ～ 2025.03』、愛知県博物館協会。

資料収集・保存等

寄贈資料――

なし

資料修復・資料保存等――

- ・ 例年実施している専用防虫剤の入れ替えに加え、前年度からひきつづき、衣料コレクションを中心に、劣化状態の進んでいる資料を優先して選出し、中性紙製の専用保存箱への収納作業を計画、専用箱の補充。収蔵庫の保管スペースが不足しているため、棚上のスペースの利用を計画し、耐震対応をあわせて検討。
- ・ 2022年度に建築図面資料に付随して受け入れた大学歴史資料について、各種資料の形状に応じた保存方法、作業計画。

当館の収蔵資料総計は下表のとおり。

収蔵資料点数一覧

2025年3月31日現在

地 域		点数	計
シルクロード	コイン	616	718
	その他	102	
オセアニア	オセアニア	479	479 (76)
アジア	西アジア	74	882 (65)
	東アジア	531	
	東南アジア	201	
	南アジア	76	
アメリカ	アメリカ	259	259 (24)
アフリカ	アフリカ	96	96 (8)
ヨーロッパ	ヨーロッパ	159	159 (6)
その他	その他	10	10
小 計			2,603 (179)
その他：コレクション関連資料等			1,475 (22)
合 計			4,078 (201)

() は、写真・映像資料数。書籍および参考資料は除く。

教育・普及

生涯学習の企画及び実践――

2024年度 特別講座＜古典絵画＞の開講

- 会場 : 中部大学10号館106Jゼミ室
期間 : 2024年4月17日(水)～2025年1月15日(水)
参加 : 12人(学外一般参加者=受講料有料・定員制・通年)
目的 : 大学博物館における絵画制作素材研究を通じて生涯学習の教育普及。
概要 : 本誌『年報13号』23頁参照
指導講師: 下川 辰彦 画家・日本美術院特待・中部大学民族資料博物館外部専門委員
担当 : 原田 千夏子

その他の教育普及活動――

CAAC授業「旅と文学」内見学

- 会場 : 中部大学民族資料博物館 体験実習室
期日 : 2024年11月15日(金)
参加 : 14人
概要 : 所蔵資料について解説と鑑賞
解説題目: 《源氏物語絵巻》～彩色に託された思いと時代性
・ 大和絵・絵巻の様式的特徴
・ 国風文化
・ 平安時代の色(植物染料、顔料、金銀)
・ 祈りのための絵
・ 四季と仏教「無常観」
対象作品: 中部大学蔵の大和絵の模写作品
《模写 源氏物語絵巻「柏木(三)」》
(原本 徳川美術館本)
《模写 扇面古写経絵図》
(原本 東京国立博物館本)
《模写 平治物語絵巻 六波羅行幸巻》
(原本 東京国立博物館本)
日本画の顔料と染料の重ね塗りの色見本パネル
(制作: 中部大学民族資料博物館、協力: 下川辰彦 外部専門委員)
授業担当: 岡本 美和子 CAAC授業「旅と文学」講師
解説担当: 原田 千夏子 中部大学民族資料博物館

博物館資料の貸出と活用――

2023年度

該当なし

調査・研究業績

以下の記載形式は、本学の『教育・研究活動に関する実績資料』（中部大学高等教育推進部）に準じる。

中野 智章——

B. 論文＝

1. “Diamond Motif as an Image of Egyptian Kingship.” ORIENT 59, pp. 5-12.

B. 記事＝

1. 「京都大学総合博物館古代エジプト出土資料写真, 2011-2018.」
京都大学研究資源アーカイブ (村上由美子氏との共同監修)
URL: <https://peek.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/ark:/62587/ar230169.230169>
2. “Introduction to Special Issue.” (with Nozomu KAWAI) ORIENT 59, pp.1-4.

D. 諸活動＝

1. 一般財団法人こまき市民文化財団「理事会」、2024年6月。
2. 一般財団法人こまき市民文化財団「臨時理事会」、2024年9月。
3. 一般財団法人こまき市民文化財団「理事会」、2025年2月。
4. 一般社団法人日本オリエント学会、編集委員。

[民族資料博物館関連印刷物]

- ・ 巻頭・編集・発行「中部大学民族資料博物館 ニュースレター19号」、2024年6月。
- ・ 巻頭・編集・発行（2024年度秋季企画展）「江戸の牡丹ブームと芭蕉」展図録、2024年10月。
- ・ 巻頭・編集・発行「講演記録2023」、2024年10月。
- ・ 編集・発行「中部大学キャンパス・アートマップ（2024改訂版）」2025年2月。
- ・ 巻頭・編集・発行「2024年度特別講座受講生作品展－風炉先屏風に描く」図録、2025年3月。

大場 裕一 ——

B. 論文＝

1. Yano, D., Pholyotha, A., Sutcharit, C., Tongkerd, P., Oba, Y. & Panha, S. (2024) Analyses of the bioluminescence mechanism in the land snail,

Quantula weinkauffiana. *Luminescence* 39, 34796.

2. Kato, M., Tsuchihashi, K., Kanie, S., Oba, Y. and Nishikawa, T. (2024) A practical, biomimetic, one-pot synthesis of firefly luciferin. *Sci. Rep.* 14, 30461.
3. Paitio, J., Oba, Y. (2024) Luminous fishes: Endocrine and neuronal regulation of bioluminescence. *Aquaculture and Fisheries* 9 (3) 486-500.

C. 口頭研究発表・講演ほか＝

1. Oba, Y. (2024) Copepods have changed the marine bioluminescence world. 15th International Conference on Copepoda, Hiroshima, Japan (International Conference Center, 3 June 2024)
2. 「光る生き物の不思議」サイエンスワールド特別講演会、2024年8月11日。
3. 「発光生物の不思議とその科学 令和6年度SSH特別講演会」さいたま市立大宮北高等学校体育館大ホール、2024年9月30日。
4. 「科学大好きな皆さんへ 光る生きもの博士が誕生するまで！」中部大学地域連携ジュニア2024（文化フォーラム春日井）、2024年12月8日。

[民族資料博物館関連印刷物]

- ・ 巻頭・編集「中部大学民族資料博物館 ニュースレター19号」、2024年6月。
- ・ 編集（2024年度秋季企画展）「江戸の牡丹ブームと芭蕉」展図録、2024年10月。
- ・ 編集「講演記録2023」、2024年10月。
- ・ 編集「中部大学キャンパス・アートマップ（2024改訂版）」2025年2月。
- ・ 編集「2024年度特別講座受講生作品展－風炉先屏風に描く」図録、2025年3月。

原田 千夏子——

B. 記事＝

1. 活動報告「特別講座（古典絵画）2022年度受講生作品展—— 画絹に描く～扇面と短冊」（「中部大学民族資料博物館 ニュースレター19号」、2024年6月）
2. 活動報告2023年度秋季企画展「松浦晃一郎コレクション（新規寄贈彫刻）—— 彫刻から見たアフリカ」展（「中部大学民族資料博物館 ニュースレター19号」、2024年6月）
3. 活動報告「国立民族学博物館長の吉田憲司先生によ

る松浦コレクション見学」
 (「中部大学民族資料博物館 ニュースレター19号」、
 2024年6月)

4. 活動報告「松浦晃一郎コレクション(アフリカ木彫)についての講話および座談会の記録」
 (「中部大学民族資料博物館 ニュースレター19号」、
 2024年6月)
5. 常設展示アフリカ地域のコーナー展示再編
 (「中部大学民族資料博物館 ニュースレター19号」、
 2024年6月)

C. 口頭研究発表・講演ほか＝

1. 論文「研究ノート：片岡球子の色彩表現と造形性について～赤系統の色を基調とした地塗り、本塗りによる制作過程」
 「中部大学民族資料博物館 年報12号」、48-58頁、
 2024年10月。
2. 解説《源氏物語絵巻(柏木三)》他[平安時代後期の浄土教美術について]
 (中部大学民族資料博物館、CAAC講義内、2024年11月17日)

D. 諸活動＝

1. 企画・編集「中部大学民族資料博物館 ニュースレター19号」、2024年6月。
2. 企画・編集(2024年度秋季企画展)「江戸の牡丹ブームと芭蕉」展図録、2024年10月。
3. 企画・編集「講演記録2023」、2024年10月。
4. 企画・解説・編集「中部大学 キャンパス・アートマップ(2024改訂版)」、2025年2月
5. 企画・解説・編集「2024年度特別講座受講生作品展－風炉先屏風に描く」図録、2025年3月。
6. 愛知県豊川市教育委員会文化財保護審議会委員
 豊川市文化財保護審議会
 第1回 2024年6月21日
 第2回 2024年12月20日
 第3回 2025年3月27日

出張業務

- | | |
|--------|-------------------------------------------------------|
| 6月14日 | 令和6(2024)年度愛知県博物館協会総会
(名古屋市科学館)(原田) |
| 6月21日 | 令和6年度第1回文化財保護審議会
(愛知県豊川市教育委員会)(原田) |
| 10月22日 | 令和6年度愛知県博物館協会 職員研修会
(愛知県豊田市美術館、豊田市博物館)(中野)
(原田) |
| 11月29日 | 資料調査(京都国立博物館)(原田) |
| 12月20日 | 令和6年度第2回文化財保護審議会
(愛知県豊川市教育委員会)(原田) |
| 3月27日 | 令和6年度第3回文化財保護審議会
(愛知県豊川市教育委員会)(原田) |

会議

定例打合せ――

- 第1回 2024年4月5日
- 第2回 2024年4月16日
- 第3回 2024年5月7日
- 第4回 2024年5月21日
- 第5回 2024年6月11日
- 第6回 2024年6月26日
- 第7回 2024年7月30日
- 第8回 2024年9月24日
- 第9回 2024年10月15日
- 第10回 2024年11月19日
- 第11回 2024年12月17日
- 第12回 2025年1月23日
- 第13回 2025年2月27日

外部専門委員会――

第1回 議事（2024年12月9日）

報告事項

- 1 中部大学民族資料博物館（概要）
- 2 2023年度の活動状況
- 3 博物館資料の保存と公開について
当館の活動全般評価

運営委員会――

第1回 議事（メール審議：期間2024年4月3日～4月12日）

審議事項

2024年度 外部専門委員会委員の委嘱（案）

第2回 議事（2024年7月12日）

報告事項

- 1 2023年度 活動報告
- 2 2023年度 決算報告

審議事項

- 1 2024年度 事業計画案
- 2 2024年度 予算案
- その他「博物館法」改正にともなう「指定」施設への審査について

第3回 議事（2025年2月6日）

報告事項

2024年度秋季企画展入館者数ほか

審議事項

- 1 「中部大学民族資料博物館管理運営細則」の一部改正案
- 2 2025年度外部専門委員の委嘱（案）
- 3 2025年度 催事案

2

組織・施設



外部専門委員会における展示室見学
2024年12月9日（左・中野館長）

組織 1

職員

2025年3月31日現在

館長	中野 智章 国際関係学部長 教授 学芸員資格保有
副館長	大場 裕一 応用生物学部環境生物科学科 教授
専任事務員	中村 正男 中部大学 学事部担当部長
専任事務員	原田 千夏子 学芸員兼務（学芸員資格保有） 学事課（民族資料博物館担当）
事務補助員	梶藤 有美（嘱託）
事務補助員	宮沢 桂子（契約事務補助員）

組織 2

運営委員

（職指定）

委員長	民族資料博物館長・国際関係学部長 教授 中野 智章
委員	民族資料博物館副館長 応用生物学部環境生物科学科 教授 大場 裕一
委員	副学長・現代教育学部幼児教育学科 教授 花井 忠征

（学長指名）

同	工学部建築学科 准教授 山岸 綾
同	国際関係学部国際学科 准教授 宗 婷婷
同	人文学部日本語日本文化学科 教授 嘉原 優子
同	人文学部日本語日本文化学科 教授 岡本 聡
同	人文学部メディア情報社会学科 講師 河村 陽介
同	応用生物学部環境生物科学科 准教授 上野 薫
同	理工学部数理・物理サイエンス学科 教授 大嶋 晃敏
同	分析計測センター 助教 六車 香織
同	管財部長 竹田 佳乃
同	学事部長 竹中 正和
同	学事部担当部長 中村 正男
同	学事部学事課 原田 千夏子

（庶務）

学事部

外部専門委員

- 委員 阿児 雄之（東京国立博物館 学芸企画部博物館
情報課情報管理室長）
- 委員 井口 智子（名古屋市美術館 学芸課長）
- 委員 下川 辰彦（画家・日本美術院特待）

中部大学民族資料博物館規程

(設置)

第1条 中部大学（以下「本学」という。）における教育、研究及び文化の振興を図るため、中部大学民族資料博物館（以下「博物館」という。）を設置する。

(目的)

第2条 博物館は、本学の教育方針にのっとり、文化的資料、記録、視聴覚教育資料その他必要な資料（以下「博物館資料」という。）を収集、整理、保存、公開して教職員、学生等の利用に供するとともに、展覧会等を通して社会貢献を行うことを目的とする。

(事業)

第3条 博物館は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事業を行う。

- (1) 博物館資料を収集し、保管し、及び閲覧に供すること。
- (2) 展覧会、講演会等の催しを開催し、及び他のものが行うこれらの催しに協力すること。
- (3) 博物館資料の利用に関し、必要な説明、助言等を行うこと。
- (4) 解説書、調査研究の報告書等を作成すること。
- (5) 他の博物館等と連携し、及び協力すること。
- (6) 地域の教育文化施設が行う文化、文学、美術等芸術に関する活動を援助すること。
- (7) その他博物館の目的を達成するために必要なこと。

(職員)

第4条 博物館に、博物館長、副館長及びその他学芸員など必要な職員を置く。

(博物館運営委員会)

第5条 博物館に、博物館の運営に関する重要事項を審議するため、博物館運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関する事項は、別に定める。

(利用)

第6条 博物館の利用に関する事項は、別に定める。

(事務)

第7条 博物館に関する事務は、学事部において処理する。

(施行細則)

第8条 この規程に定めるもののほか、博物館の管理及び運営に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、学長が定める。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成26年4月16日から施行し、平成26年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、2019年4月17日から施行し、2019年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、2020年9月16日から施行し、2020年7月1日から適用する。

中部大学民族資料博物館 運営委員会規程

(設置)

第1条 中部大学民族資料博物館規程第5条第2項の規定に基づく、民族資料博物館運営委員会（以下「運営委員会」という。）に関する事項は、この規程の定めるところによる。

(審議事項)

第2条 運営委員会は、次の各号に掲げる事項を審議する。

- (1) 博物館の運営、整備に関する基本事項
- (2) 博物館の利用方策（地域等への開放を含む。）に関する事項
- (3) 博物館情報システムに関する事項
- (4) その他博物館の運営に関する重要事項

(組織)

第3条 運営委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 副学長のうちから学長が指名する者
- (2) 博物館長
- (3) 副館長
- (4) 学長が指名する者

(任命)

第4条 委員は、学長が任命する。

(任期)

第5条 第3条第4号の委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 前項の委員に欠員が生じ、学長が欠員を補充する場合の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第6条 運営委員会に委員長を置き、博物館長をもって充てる。

2 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員が、その職務を代理する。

(定足数及び議決数)

第7条 運営委員会は、委員の過半数の出席によって成立し、議事は出席者の過半数で決する。

(審議結果の報告)

第8条 委員長は、運営委員会において決定した重要事項を中部大学協議会に報告するものとする。

(専門部会)

第9条 運営委員会に、必要に応じて、専門部会を置くことができる。

2 専門部会に関する事項は、別に定める。

(庶務)

第10条 運営委員会の庶務は、学事部において処理する。

(運営細則)

第11条 この規程に定めるもののほか、運営委員会の運営に関し必要な事項は、運営委員会の議を経て、学長が定める。

附 則

この規程は、平成23年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成26年4月16日から施行し、平成26年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、平成29年6月21日から施行し、平成29年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、2019年4月17日から施行し、2019年4月1日から適用する。

附 則

この規程は、2020年9月16日から施行し、2020年7月1日から適用する。

中部大学民族資料博物館

外部専門委員会設置要項

(設置)

第1条 中部大学民族資料博物館（以下「博物館」という。）に、博物館の活動について、学外の有識者から適切な指導・助言及び評価を得るため、中部大学民族資料博物館外部専門委員会（以下「外部専門委員会」という。）を置く。

(組織)

第2条 外部専門委員会は、学外の有識者で組織し、委員は、博物館運営委員会の議を経て、館長が委嘱する。

2 委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

3 外部専門委員会に委員長を置き、委員の互選により定める。

(招集)

第3条 外部専門委員会の開催は、必要に応じて館長が招集する。

(庶務)

第4条 外部専門委員会に関する庶務は、学事部において処理する。

(その他)

第5条 この要項に定めるもののほか、外部専門委員会について必要な事項は、博物館運営委員会の議を経て、館長が定める。

附 則

1 この要項は、2020年4月1日から施行する。

2 中部大学民族資料博物館外部専門者会議（博物館外部委員会）施行規則（平成24年7月1日制定）は、廃止する。

中部大学民族資料博物館 管理運営細則

(趣旨)

第1条 この細則は、中部大学民族資料博物館規程第8条の規定に基づき、博物館の入館等に関し必要な事項を定めるものとする。

(博物館の開館)

第2条 博物館の開館は、平日の月曜から金曜までの午前9時30分から午後4時30分までとし、入館は閉館の30分前までとする。ただし、大学の定める休日や夏季一斉休業期間、冬季年末年始の休業期間は閉館することがある。

(博物館の見学)

第3条 博物館の見学は無料とし、学内外のすべての人が入館することができる。

2 団体による見学を希望する者は、様式1の申請書を提出のうえ、見学の許可を受けるものとする。

(写真撮影及び写真の使用)

第4条 展示室での写真撮影は、著作権に該当しない展示資料については個人利用に限り自由に撮影できるものとする。ただし、調査研究のために撮影を希望する者や、発表物（出版物、学術発表、映像制作物等）へ画像利用する者は、様式2の申請書を提出のうえ、撮影許可を受けるものとする。

2 撮影された写真の利用に関しては、次の条件を満たすことを必要とする。

- (1) 利用に際しては、中部大学民族資料博物館の所蔵であることを明示すること。
- (2) 撮影、借用等によって得られた複製物については、申請書に記載した目的又は方法以外の利用並びに転貸は禁止とする。
- (3) 著作権法上の問題が生じた場合は、申請者がその責をすべて負うこととする。
- (4) 出版物及びテレビ放映等に利用した場合には、当該出版物を添えて報告すること。
- (5) 撮影によって資料を損傷したときは、資料の修復及び再製等に要する経費は申請者が負担する。

(収蔵資料の調査)

第5条 展示室で収蔵資料についての調査を希望する者は、様式3の申請書を提出のうえ、調査の許可を得るものとする。

2 調査を許可する際は、次の条件を付す。

- (1) 撮影・借用等によって得られた複製物について、申請書に記載した目的又は方法以外の利用並びに転貸は禁止とする。
- (2) 閲覧によって資料を損傷したときは、資料の修復及び再製等に要する経費は申請者が負担する。

(収蔵資料の貸出)

第6条 博物館の収蔵資料の貸出については、別途博物館貸出要綱に基づいて運営するものとする。

(資料の寄贈及び評価)

第7条 博物館資料の寄贈については、別途博物館寄贈資料受入要綱及び資料評価要綱に基づいて運営するものとする。

附 則

この細則は、2012年4月1日から施行する。

この細則は、2025年4月1日から施行する。

資料写真撮影、掲載申請書

(様式2)	年 月 日
中部大学民族資料博物館長 殿	
申請者 (住 所) (機関名) (代表者)	
資料写真の撮影、掲載について(依頼)	
下記のとおり、貴館収蔵資料の写真使用・掲載を申請します。	
記	
1. 資料名	(点)
2. 資料提供の形式 フィルム・デジタルデータ・その他()	
3. 掲載出版物・製作物名	
4. 掲載書発行予定年月日 年 月 日	
5. 担当者氏名・連絡先	
6. 備考	以上

展示室見学申請書

(様式1)	年 月 日
中部大学民族資料博物館長 殿	
(団体名) (代表者名)	
展示室見学について(依頼)	
下記のとおり、団体見学の受け入れをお願いいたします。	
記	
1. 日時 年 月 日() 時 分 ~ 時 分	
2. 人数 内訳)・引率者 人 ・小学生未満 人 ・小学生(学年) 人 ・中学生(学年) 人 ・高校生(学年) 人 ・学生 人 ・大人 人	
3. 目的	
4. 担当・引率者氏名 連絡先	
5. 備考	以上

資料調査申請書

(様式3)	年 月 日
中部大学民族資料博物館長 殿	
申請者 (住所) (連絡先) (氏名) (所属)	
資料調査願	
貴館所蔵の資料を下記のとおり調査させていただきたく、お願い申し上げます。	
記	
1. 日時	
2. 資料(資料名・利用資料点数を明記)	
3. 目的	
4. 方法(閲覧・撮影・実測など)	
5. 備考	以上

中部大学民族資料博物館寄贈資料受入要綱

(目的)

第1条 この要綱は、博物館の寄贈資料の受け入れに関し必要な事項を定めるものとする。

(条件)

第2条 寄贈資料を受け入れしようとするときは、次の各号の条件に適合するものでなければならない。

- (1) 寄贈資料の受け入れをしようとするときは、学術的かつ研究的に優れたものである場合のほか、高額及び大量の寄贈資料を受ける場合は、民族資料博物館運営委員会の議を経なければならない。ただし、教職員の退職等の際に寄贈を受ける場合は、所属長の推薦を必要とする。
- (2) 寄贈資料は、保存が可能であり維持管理ができるものであること。
- (3) 資料の活用について、寄贈条件が付けられていないものであること。

(評価)

第3条 寄贈資料については、原則として評価を受けなければならない。

(表彰)

第4条 高額な資料の寄贈については、感謝状ないしは表彰をすることができるものとする。

(その他)

第5条 学校法人中部大学固定資産及び物品管理規程の物件に該当する寄贈申し込みがあった場合は、規定に基づき受贈手続きを行う。また、受け入れにあたって工事等が必要となる場合は、事前に管財部と協議するものとする。

附 則

この要綱は、平成24年4月1日から実施する。

資料寄贈申請書

資料寄贈申請書

中部大学民族資料博物館 殿

申請者

住所 〒

電話 ()

氏名 印

私儀、所蔵する下記資料を寄贈したく、ここに申請します。
寄贈・寄託後の保管・取扱いほかについては、貴館にすべて委任します。

資料名	
資料分類	民族資料／美術・芸術資料／文化・社会史資料／自然史・技術史資料／画像・音響・データメディア資料／図書・文書資料／その他
資料種類・仕様	
形状・数量	計 点
資料制作者・製作団体	制作者氏名： (年生— 年没)
制作・製作・成立地・収集地	制作地：
成立事由	事由：
資料制作・成立年月	年 月 日 (頃) < 時代 >
本資料の来歴1： 取得先・関係機関 取得からの経緯	本資料取得先： 取得から現在までの経緯：
取得年月日 取得金額	年 月 日 (頃) 取得 円 (相当)
本資料の来歴2： 展示・研究紹介ほか	
寄贈申請理由	
備考	

※記入欄が不足するときは、別紙に一覧等で作成のうえ資料として添付。

中部大学民族資料博物館収蔵資料貸出要綱

(趣旨)

第1条 この要綱は、博物館の収蔵資料の貸出に関し必要な事項を定めるものとする。

(貸出期間)

第2条 収蔵資料の貸出期間は、原則として2ヶ月以内とする。ただし、博物館長が特に必要と認めた場合には、この貸出期間を変更することができる。

(借用願)

第3条 収蔵資料の貸出を受けようとする者は、様式1による収蔵資料借用願（以下「借用願」という。）を博物館長に提出し、その許可を受けなければならない。ただし、高額及び大量の貸出については、民族資料博物館運営委員会の議を経なければならない。

(貸出の許可)

第4条 博物館長は、借用願の内容を適当と認めた場合は、次の条件を付して貸出を許可することができる。

- 貸出を許可した収蔵資料（以下「貸出資料」という。）については、損傷、亡失等のないよう万全の措置を講ずるとともに所要の保険に加入し、不測の事故に備えること。
ただし、博物館長が特に必要でないと認めた場合は、この限りではない。
- 貸出資料を損傷、亡失等した場合には、申請者が弁償の責を負うこと。
- 貸出資料を借用の目的以外の用途にあてないこと。
- 貸出資料の写真撮影、模写等は行わないこと。ただし、事前に許可を受けた場合は、この限りではない。
- 撮影、借用等によって得られた複製物について、申請書に記載した目的又は方法以外の利用並びに転貸は禁止とする。著作権法上の問題が生じた場合は、申請者がその責をすべて負うこと。
- 貸出資料をやむを得ない理由により貸出許可期間内に返却できないときは、速やかにその旨を博物館長に報告し、許可を得ること。
- 貸出資料の取扱いは、学芸員又はこれと同等の能力を有すると認められた者に行わせ、また、運搬にあたっては美術運搬の専門業者に行わせるものとする。ただし、博物館長が特に必要でないと認めた場合は、この限りではない。

(借用書)

第5条 借用許可を受けた者は、貸出資料と引き換えに博物館長に様式2による借用書を提出すること。

(貸出時と返却時の確認)

第6条 博物館長は、返却された貸出資料の状態を借利用者立会いのもとに写真その他の方法により点検し、原則として様式3による貸出・返却資料確認調書を作成する。

(貸出期間中における返却義務)

第7条 借利用者が本要綱に定める条件を履行しないとき、又は大学が貸出資料を必要とするときは、借利用者は貸出期間中であっても当該貸出資料の返却を拒むことができない。この場合、借利用者に損害が生じてもこれに対する補償を要求することはできない。

(その他)

第8条 高額及び大量な貸出申込があった場合は、貸出資料等を調査し、事前に管財部と協議するものとする。

附 則

この要綱は、平成24年4月1日から実施する。

収蔵資料借用申請書

(様式1)	
年 月 日	
中部大学民族資料博物館 殿	
(借利用者住所) (借利用者氏名)	印
収 蔵 資 料 借 用 願	
貴大学の収蔵資料について、下記のとおり借用したいので、よろしくお願いします。	
記	
借 用 目 的	
借 用 期 間	年 月 日から 年 月 日まで
利 用 場 所	
利 用 方 法	
借 用 資 料 品 名 ()	
資料取扱責任者	

施設概要

展示室——

シルクロード室	171.58㎡
常設展示室	444.77㎡
多目的室	80.20㎡

学習スペース——

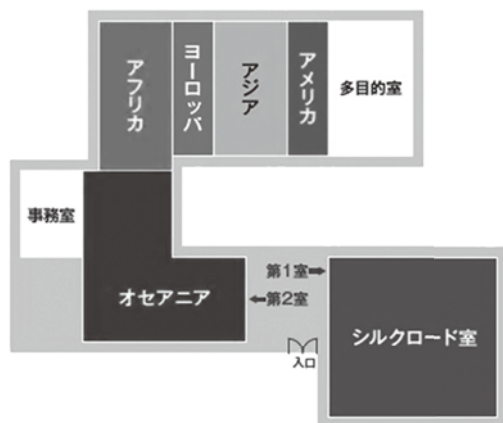
(約30㎡・展示室内に設置計画中)

収蔵庫——

解梱・撮影用前室（収蔵庫1）	53.25㎡
収蔵庫（収蔵庫、収蔵庫3、搬入用経路含）	126.49㎡

事務室——

事務室 約40㎡（展示室内・2025年3月21日移転）



展示室平面図
(2025年3月31日現在)

3

論文・研究調査



館職員による作品解説の様子
(2024年11月15日)

片岡球子の色彩表現と造形性について (2) ～絵画表現としての金箔の扱い

原田 千夏子

<序>

現代日本画家のなかにおいて異彩を放つ片岡球子(1905-2008)の表現について、筆者は前稿で赤色系の色に注目して作品の観察を試みた⁽¹⁾。片岡本人が「私の個性とは、絵の持つ熱っぽさ、色の持つむっとするようなねばり気、そして内容に対する迫力」と語っていたように⁽²⁾、彼女独特の表現とはその色彩感覚にある。色そのものの持つ、色の「強さ」を好むというもので、日本画の岩絵具や顔料を使い、色層を塗り重ねる描き方によって生まれる豊かな色の表情を片岡はこよなく愛した。特に、画面の地塗りをした色に対して、その上層に地塗りで用いた色の反対色、すなわち色彩学でいうところの補色の関係にある対比的な色を置く、という配色の仕組みから深みのある色を作り出すというものだった。

また片岡は自身の求める表現のためには、日本の伝統的な絵具だけではなく、そこに外来の顔料も併用するなど、東西美術の境界を自由に越えて、意欲的に材料研究を続けた⁽³⁾。その過程では、鮮やかな色の使用だけでなく、日本画における伝統的な材、金銀箔、金銀の泥、砂子などの扱いについても、既存の枠にとらわれない、片岡ならではの絵画表現へ展開させている。その結果、同じ北海道出身の同世代の日本画家の岩橋英遠(1903-1999)と比べてみても、自然をテーマにしながら両者は全く異なる表現世界に向かったことは一目瞭然である。岩橋は、大地の景観に溶け込んでいくようなおだやかな色調を究めていったのに対し、片岡は輝く金銀の色と常に対等に鮮やかな色を組み合わせる画面から強いエネルギーを生み出すような作品を作り出した⁽⁴⁾。箔は、もともと日本絵画の伝統では装飾的な技術としてみられる一面もあるが、片岡の場合は、金銀の色も絵画の一つの色として取り上げていったのである。このことからしても、片岡が鮮やかな色を求めたのは、光を放つ箔の強さに負けない色を求めたことも理由にあったといえるだろう。本稿では、片岡の表現世界をより深く理解するために、金銀箔や泥の扱いの変遷に焦点をあてて、その色彩表現について再度観察してみたいと思う。

片岡が積極的に金銀箔や泥を使うようになるのは50歳に入る頃で、ちょうど片岡が大学へ奉職した時期にあたる。47歳で日本美術院の同人に推挙され、後半生における代表作の制作へ向けた気概を込めていたであろうとき、

金銀箔や泥の本格的な導入を進めたのである。より強い印象を画面に与える表現を求めての格闘の始まりであり、それはまた片岡の伝統に対する再解釈への挑戦を意味することになった。その一例を知ることとして、片岡は金泥を塗布する際に、筆ではなく指を使って画面に塗りつける描法なども行っていたという。あえてその指の跡を面白さとして表現要素に取り入れていたのである⁽⁵⁾。

片岡が金箔の研究を意欲的に作品に取り入れ始めた昭和30年代半ばとは、戦後の高度成長期で、画材の分野においても次々と開発が進んでいた⁽⁶⁾。アンフォルメル旋風やアクション・ペインティングといった、欧米から抽象表現という新たな価値観が紹介された時期でもあり、日本の美術家たちが大いに影響を受けたのだった。片岡も東西美術に関心を自由に広げ、伝統的な材と新たな代用材を組み入れていく実験的な試みを進めることができたのは、これら時代の気運もあった。

本稿では、片岡の後年の作品について金箔を中心に観察するために、大きく3つの時期に分けることにした。

[1] 第一期は、1950年代後半から60年前半の時期にかけての「海シリーズ」や伎楽や舞楽など伝統文化を題材にした作品群で、絵具の厚塗りによる、ザラザラ、ゴツゴツと隆起した質感を荒々しい筆致で、激しく強調する作品が多い。はじめは画面で箔や泥を使う箇所もモチーフの部分的で箔の色みにもぶい印象を受けるが、しだいに金箔で描く抽象的な形態を大きく描き入れるようになっていき、絵画の要素として存在感を高めていく。

[2] 次の第二期は、1960年代後半からの「山シリーズ」で、徐々に厚塗りは影を潜め、筆致も控めで、色面を組み合わせる画面を作る表現へと変わっていく。この頃から金銀の箔を画面の広い面積にわたって用いるようになる。これは、画面の余白空間に対する意識の変化といえよう。

そしてさらに、[3] 第三期は、平成年間に入る頃、「面構シリーズ」、「富士シリーズ」において、1990年前後から金銀箔や泥を背景に貼りこむ屏風作品に数多く取り組むようになると、画面全体の構図と色面構成を考慮するなかで、金箔を活用することで表現が華やかさと同時に、深い落ち着きの共存する「凄み」ある色を主とする画面表現を生み出していくのである。

こうしたメインテーマとなる題材を選び取っていく変遷は描き手にとって重要であるが、片岡の場合はテーマ

を通じて画面に強く訴える表現をいかに工夫するかという思考のもとに進化したと考えられる。次に続く本文では、この変化をたどりながら、片岡作品を観察してみる。

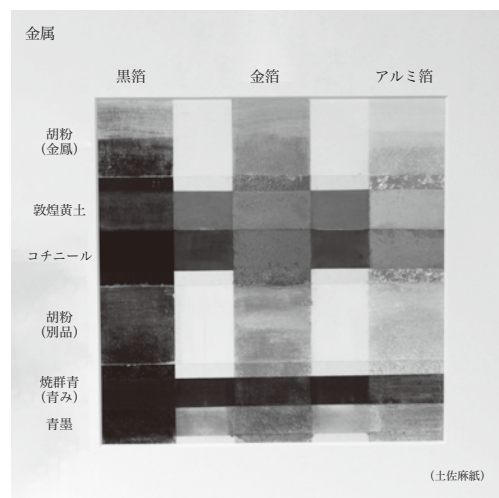
＜1 伝統技法における金銀箔、金銀泥の扱い＞

片岡作品をみていく前に、金銀箔の伝統的な扱い方の基本について確認しておきたい。

日本画の伝統的な技法は、絵具や基底材など材料についての特殊な技術や習練が求められるもので、その取り扱い方法は近世以前では秘技とされ、絵画の流派のうち限られたものへの口伝によって継承されてきた。例えば、金銀の箔や、それを砕いて絵具として用いる泥の扱いは、材料が高価なうえ、職人が長年かけて技を習得するような難しい技術を要する。箔の場合は、一般的な数値でいうと薄さ約10,000分の一ミリの極薄に加工された金属片をピンと張った状態で基底材の画面に貼り合わせる。泥は、箔を粉碎して温めながら膠で溶き、上水を捨て練り上げる工程を繰り返して絵具のように液状にして筆を用いて塗布する。また保存のためには変色を避けるための工夫や、定着剤の膠を抜く作業を行うなど、成分の性質を十分理解したうえで諸々の処理に手間がかかる。こうした技法は、現代においても、専門大学における模写を通じた研究に携わるほかは、個々に実験を通じて体得する以外に術はないに等しい。

技法書としては、『画筌』（1721年刊・狩野派で学んだ絵師、林守篤）や、『丹青指南』（1926年・狩野派の絵師、市川守静）、『芥子園畫傳』（江戸時代・中国より元禄年間に伝来。18世紀半ば頃には翻刻本が普及といわれる）などがある⁽⁷⁾。また片岡が30歳代であった昭和初期には、これらの記録書から材料別に抜き書きをした画法の指南書が一般向けに出版されている⁽⁸⁾。大正デモクラシーの波を経た後、伝統文化の継承意識も一方で叫ばれていた時代背景の一例として捉えておきたい。

箔の扱い方については、種類に応じて微妙に厚みが異なる点が特徴的である。箔の下地に置いた色が透けてみえる種類の場合は、用途に応じて下地に置く色を使い分けるものとされていた。伝統的な技法としては、金箔の下貼りには黄紙を用いるとされる。また金箔の下地に塗るとよいとされた色は、赤色系統では「黄膠（朱と藤黄、膠を混ぜたもの）」や「黄土」が、青色系統では「群青」である⁽⁹⁾。これらの色は、箔を重ねることで、赤みがかった金、青みがかった銀、というように上層の金属自体の発色効果をより引き出すことができると考えられた。光に対しても色調を生み出すという、繊細な感性のもとで発達してきた、日本の伝統美の一つの特性といえよう。ちなみに、また本金を用いた泥には、「濃く赤い色（焼金）」、



〔写真1〕箔の重ね塗り実験パネル
（制作：下川辰彦氏／中部大学民族資料博物館蔵）

「色好し」、「仲色（中金）」、「常色（青金）」といい、銀の含有量に応じて5種の色みに分けられていたとされる。また、泥を箔から作ってから膠を用いて描く際に、膠の濃度が濃すぎると金色の発色が鈍ってしまう性質もあるとされ、使用法には細心の注意を払う必要のある難しい材料といわれる⁽¹⁰⁾。このことからみても、箔から泥を作る工程は、発色に関わる点で絵画に用いる場合は特に注意して扱う必要があったことがわかる。

これらの、箔の下に置く下塗りの色について、参考までに、近代以降の色彩学における色相環における彩度の数値を参照してみよう。例えば、朱（鮮やかな赤）は85、藤黄（鮮やかな黄）は90、黄土（鮮やかな橙）は90、群青（鮮やかな青紫）は100を示し、いずれも彩度の高い「強い色」に区分される。上層に置く金銀の強い光を受けてなお、色の存在を表すためには、このように彩度の高い「強い」色と合わさることで生まれる色みを特有の美しさとして、伝統技法上では認識されていたのである。筆者も色の重ね塗りの実験によって、その効果を確認したことがある〔写真1〕⁽¹¹⁾。

＜2 金箔の装飾的な使用から絵画的要素への過渡期～海シリーズ＞

〔1〕後年第一期（1950年代後半～1960年代前半）

こうした箔の取り扱いの基本を土台に、片岡はどのように応用していったか。日本においては、金銀箔を用いた絵画の発展には、江戸時代の琳派の存在が大きい。院展の往年の画家たちに続き、片岡もまた琳派の表現を大いに参考している様子は、「海シリーズ」の作品などからみてとれる。ただ、前述のとおり、金銀箔、泥、砂子という材の扱いは知識と技術を要するもので容易にもの

にすることはできない。片岡の場合は、前田青邨（1885-1977）ほか、横山大観（1868-1958）ゆかりの表具師から教示を受けたという。希少な機会で得た知識をもとに自らの表現に適した使用法を試行錯誤して繰り返し実験を重ねていったと思われる。若い頃は代用金の使用や紙を併用して貼るなど、別材を活用して工夫したという⁽¹²⁾。

例えば、作品《潮》（1958年・名古屋市美術館）では、波や岩の形態は、俵屋宗達の《浜松図屏風》を意識した印象を受ける。背景の空にあたる部分に金泥を塗りこめる他、波の表現には、下地に金色を塗って置き、その上に胡粉で模様をつけていく際に、濃淡をつけて描き入れている。例えば、宗達が《風神雷神図屏風》で、肉身の表現に箔を貼った下地の上に胡粉を引いて、そこに水を多めに含んだ筆で金泥を置き、泥の濃淡をつけて奥行を表現したように⁽¹³⁾、片岡も色層の関係によって生まれる色の調子を試しているかのようである。しかし、金銀の箔や泥の発色は全体的に鈍く、波濤の激しい描写とは裏腹に画面から受ける印象は控えめである。まだ特には下地の色を意識していないようにもみえる。続く《真鶴の海》（1959年）や《小田原海岸》（1959年）とも共通して、まだ色層の組み合わせを習作で実験している過程といえる。金泥や墨で波の形を縁取るような曲線や、また人物の衣の文様に胡粉地の上から金色で矩形の模様をかすれ気味に描き入れ、下地を透けてみせた質感を出そうとしている点も箔の装飾的な効果に意識が向けられているといえよう。

しかし、この頃、片岡は作品をおうごとに箔や泥の扱いがめざましく変化していく。翌年の《渴仰》（1960年・東京国立博物館）では、金箔の存在感は断然強まっているのである。画面向かって右上の背景に描き込んだ金色の波は、画面のおよそ四分の一を占めるほどの広い面積を占める。連続した太い線描でうごめく模様のように描かれ、ところどころ明暗の調子を付けて下地の褐色を透けてみせ、それが画面に奥行を作る効果へとつながっている。

一方、この金の波の存在は、画面左下の暗褐色の背景空間とは、金色と（赤みの）深い黒色という、強い色の対比関係を作っていることで、手前に立つ2人の人物を画面手前に押し出すような効果に通じている。背景の金色とこの暗褐色の対比の関係は、画面で対角線上に配置される。2人の人物の髪の色鮮やかな紅白の色の関係と交錯するように画面全体で強い色の対比関係を作り、相互に引き立て合って呼応している。画面全体で、強い色彩の対比的な関係を二重に強調する配色が組まれているのである。つまり、金色を画面における構成を活かす大きな要素として位置付けているということである。それゆえに、赤、青、緑の粒子の粗い鮮やかな色、すな

わち金色のモチーフに対等に存在し、強い発信力を放つ色を採用しているのである。複数の色の重ね塗りに挑んでいる背景の褐色の色みは、題材となっている能の「石橋」の世界観に対する片岡なりの激しさを備えた解釈といえる。

さらに《幻想》（1961年・神奈川県立近代美術館）においては、箔の新たな表現に挑戦している。粗い粒子の鮮やかな緑や赤の原色を下地にして、その上層に胡粉や金箔やプラチナ箔を置き、さらに磨きだす処理をしている。下地の絵具とのかすれ具合を風合いとして透けてみせ、このザラザラとした質感によって、題材となっている舞楽の持つ壮大な宇宙観に通じる空間表現を表そうとしている。ここでの金箔の扱いも、もはや装飾の一部ではなく、描き手が作品世界に求める絵画の要素としての役割となっている。これら伝統文化を題材にした作品で片岡がみせている特徴は、日本の漆工芸にみる華やかさにも通じる。褐色の漆地に置かれるからこそ、金銀の模様は華麗に引き立つ伝統美を、片岡作品のなかにも連想するのだが、片岡は絵画という平面空間において、さらに自身の求める迫力ある表現にむけて応用しようともがいている。片岡ならではの伝統に対する挑戦と応用のはざままで葛藤する姿に観る者は圧倒させられる。

<3 構図と連動した色面の構成表現への展開～山シリーズ>

[2] 後年第二期（1960年代後半）

1960年代半ばになると、次に片岡は、山をモチーフにして形態の単純化を追求する「山シリーズ」に取り組むにあたり、色彩に対する意識がより明確になっていき、赤、青、黄、緑色といった鮮やかな色の一つの画面のなかに様々に組み入れていく表現となる。また「海シリーズ」、「山シリーズ」における基底材は、日本画では異例な麻布をしばしば採用している。彩度の高い色を中心に、重ね塗りによって強く深い色を創り出していこうとするために、画面にかかる荷重の負担に耐えるための対策が必要なのであった。しかも色を幾重にも重ねていくと、画面は割れて絵具がバラバラと剥がれ落ちてしまう。片岡は西洋顔料やアクリル絵具の併用や、線描にはフェルトペン、定着剤にはボンドを使用するなど、日本画の画材以外の材料を多岐にわたって試していったのは、この色への飽くなき探求によるものであったと思われる。

折しも、昭和30年代は、先に触れたとおりフランスから波及したアンフォルメル旋風により抽象的な表現やアメリカにおけるアクション・ペインティングの動向が、戦後の価値意識の変遷とともに日本の美術界へも強く影響し、表現者たちは表現法への可能性について意識する契機となった。片岡もこの時期に自身の進む道を「抽象」

と「具象」の間で迷い、西洋美術と直に向き合って考えるために渡欧したと語っている⁽¹⁴⁾。またこの時期、日本画と洋画（油絵）を同等に扱う現代美術の展覧会が画廊や百貨店で次々と始まった状況も、画家にとって新たな環境として意識していく必要があった。多様なジャンルの作品が陳列される会場のなかで、いかに存在感を主張して抜きん出る作品を発表するか、すなわちもう一つの新しい「会場芸術」を意識する時代を迎えていたといえる⁽¹⁵⁾。

片岡は、その後に展開していく「山シリーズ」において、時代の流れを意識しながら、日本画の画材を用いながら、西洋美術の表現を実験するかのようになり、現代美術のなかに新しい立脚点を見出そうとしたのかもしれない。現代美術が絵具の物質感そのものに感情的な表出を投影するためにマティエールの追求をしたように、片岡の厚塗りへのこだわりは、その一つの現れであろう。他方で、片岡は山をテーマにデッサンをもとに形態を単純化、抽象化する描写の修練を重ねていく⁽¹⁶⁾。厚塗りの傾向は下図を用いずに直に描いて行く過程でデッサン力を向上するための格闘もあったといわれる。その過程のなかで、画面のなかの金箔の存在感はさらに増していく。

■《死火山（妙義山）》

（1966年・北海道立近代美術館）〔図1〕

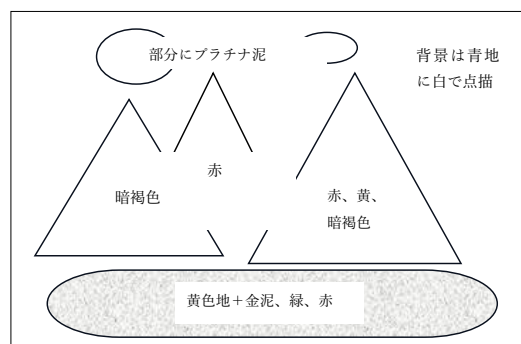
《死火山（妙義山）》では、画面のモチーフを前景、中景、後景と大きく3つの領域に配置する構成を取り、手前の前景の土坡には下地に赤色を置き、その上層に黄色や緑色で矩形の形を描き込み、ところどころに金箔を貼り合わせている。その奥に位置する中景の山は、鮮やかな赤や黄色を下地の色のメインにしているため、前景の土坡は同じ黄色系統の下地にしたことで両者が融合してより大きな存在感を表している。このとき前景の土坡に金色を重ねていることで、前景の黄色の領域は画面の前面に出てくるように感じられ、前景と中景の奥行の関係性を出す効果にもなっている。

また、空には青色を下地にして、そこに胡粉で白色の点描を置いている。これにより、青色の鮮やかさは中和され、彩度がやや抑え気味になり、青色が持つ後退してみえる色の性質は弱まる。またそこに描かれた雲の縁取りを金泥、プラチナ泥で描くことで、雲の形を抽象的に図案化された文様のように表すことができ、空の空間は、奥行よりも「面」として表そうとしているのがわかる⁽¹⁷⁾。その結果、画面の主役である、赤色や黄色を基調とした山と、その手前の土坡が融合した領域を、画面の前面に出てくるような迫力ある存在性として表す効果につながっている。

■《火山（浅間山）》

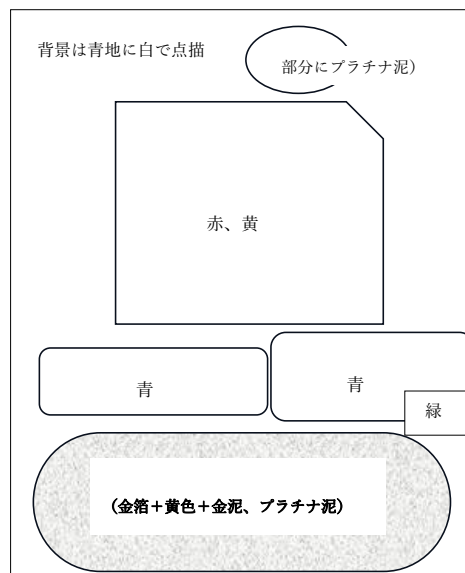
（1965年・神奈川県立近代美術館）〔図2〕

《火山（浅間山）》においても同様に前、中、後景の3つの領域の組み合わせで画面構成を組み、主役の山に赤や黄色を、空に青色を基調に配色しているが、画面の最も手前になる前景を大きく面積を取り、そこに金箔を貼った上に黄色を塗り重ね、その上に金泥やプラチナ泥によって線描を幾重にも描き込むことで、強く前に出てくる迫力をみせている。



* 金銀の金属色を鮮やかな色と対比的に色面で構成

〔図1〕 作品《死火山（妙義山）》略図
（主な色の配置関係）



* 金銀の金属色を鮮やかな色と対比的に色面で構成

〔図2〕 作品《火山（浅間山）》略図
（主な色の配置関係）

一方で、中景と前景の領域の中間にあたる山麓の里を描き入れた箇所には、濃紺や緑で暗色を置いている。赤と黄色の中間の位置に後退色の青色を配置することで、双方の領域を視覚的に違和感なくつなげている。このように、画面全体では、領域を大きく色面で区分して、赤と緑、青と黄といった補色関係で配色を組み、それぞれの色が対比し、互いに強く引き立て合う効果につながっている。片岡は、自然界の固有色をものともせず、色彩学という近代西洋で生まれた知識を学びながら、そこに日本の金箔や泥を構図に活かしていくという、造形性へのさらなる応用を試みていく。

<4 金に対等な色～面構シリーズ、富士シリーズ>

[3] 後年第三期 (1970年代以降)

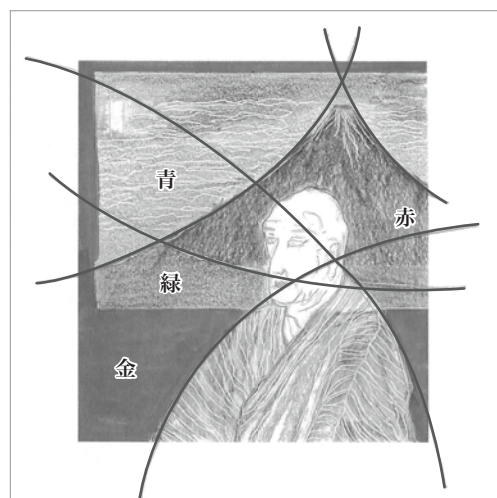
さらに、片岡は60歳半ば以降、屏風形式の大画面の作品に挑むようになる。厚塗りができない代わりに金銀箔を画面に貼りこむようになる。ときはバブル好景気の頃で、片岡は女子美術大学から愛知県立芸術大学に移り、後進の育成とともに、画家として一層の確立を目指した。またこうした環境は画材に惜しみなく財をあてることができるようになったともいえる。そして取り組んだのが「面構シリーズ」、「富士シリーズ」である。

■《面構 葛飾北斎》

(1971年・神奈川県立近代美術館) [図3]

《面構 葛飾北斎》では、金箔を貼り込んだ画面に、北斎の自画像と、北斎の作品《富岳三十六景(通称・赤富士)》をモチーフとして取り入れ、一つの作品に仕立てるといって、一見奇妙な構成をとっている。画面手前の人物と、その背後にある富士の絵は、画面に対して正中をずらし、かなり右寄りに配置している。金箔の領域は、画面向かって左側により多く面積をとっている。人物と富士はともに三角形をかたどるような単純化した形態で表されている。一方、画面全体を、幾何学的な図形の観点から見直してみると、人物は画面の右下で半円形をかたどっているともみることができる。富士の、向かって左方の稜線もまた、大きく半円形を描くような空間を作っている。円形の形は、画面の外にはみ出して感じ取ることができるので、描かれたモチーフを通じて、観る者は画面の外に広がるより大きな空間の存在感を無意識に感じ取っているのである。

このような画面構成は、富士の赤と緑、空と背景の青と金の色が対比的に互いにひき立て合っているだけでなく、ここでは金箔の下地に赤色が置かれていることで、赤色を帯びた金色は富士の鮮やかな朱色に連動してより



[図3] 作品《面構 葛飾北斎》略図
(図中の曲線：モチーフの形態を円形で解釈して筆者挿入)

両者は互いに強く存在感を出しつつ、赤色系統という色の関係性で融合もしている。それに対して人物の顔は明るく混じり気のない真白色で表されることで、画面上で浮かび上がって見える。それはまるで、画面の外に広がる広大な宇宙空間のなかで浮かび上がる惑星とでもいうように、不思議な存在感を漂わせる。

驚くことに、人物の衣の上に散りばめられた金色の点描は、金箔を砕いた砂子を用いているのではなく、金泥で細緻な点描を極細の筆によって一点一点打ち込んでいる。この執念とも思える描き込みの仕方を身体の量塊に応じて調整されていることで、人体の形態を連想させるとともに、衣の暗色と金の点描が重なることで発色が控えめな金色の調子を作っている。この色みにより、人物の存在を背景の金箔と調和しながら、人物の顔をより際立たせることにもつながっている。

このように、それまでの制作において実験してきた色の表現を土台に、表現テーマによって色の性質をよく理解したうえで、片岡はこのときすでに金箔と強い色の組み合わせのパターンを確立してきており、限られた色数でもって画面を作り上げる表現を形成しつつある。このことから、ここでの金箔による大胆な構図のとり方について、片岡が自身の好む色の表現効果の関係性のもとで発想されたものであると納得できる。

例えば、《面構 葛飾北斎》をはじめ、片岡作品の基調となる色の特徴は、人物の衣以外は、いずれも彩度が高い傾向にあるのだが[表1]⁽¹⁸⁾、それは琳派の金地の作品において、強く深い色が好まれる傾向がある特徴にも共通している[表2・表3]⁽¹⁹⁾。金地に色彩が強く映える作例としては、尾形光琳の《燕子花図屏風》(18世紀・根津美術館)や《八橋図屏風》(メトロポリタン美術館)

なども想起される。群生する花の姿を単純化した形態に置きなおし、その色みは金地に映える色としてよく吟味された青と緑の色みが選ばれている。琳派は、色の滲みよりも発色の良さをより追求することで、滲み防止の処理を施した和紙の開発や金銀箔の上に絵具を載せる技などの技術革新をもたらしたことから、その表現志向を「画面の前面に出す」ことにあったと解釈する見方もされる⁽²⁰⁾。片岡も古画を学ぶうえで、琳派において見出された、華やかさと深い落ち着きの共存するこの訴える表現力に惹かれながら研究を進めていったのではないかと思われる。

〔表1〕片岡球子《面構 葛飾北斎》の主要色の彩度（想定）

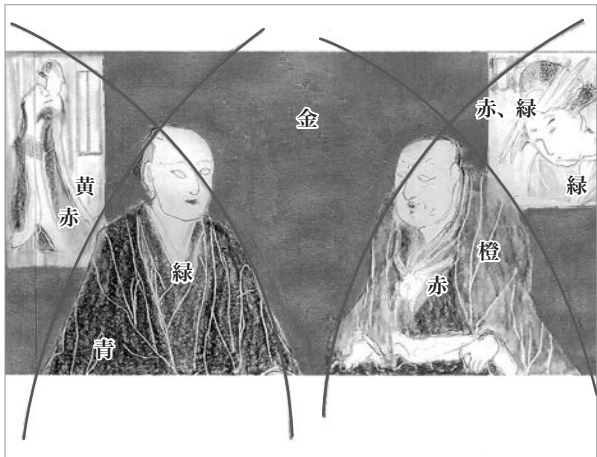
和名	色の種類	色相番号	トーン		C	M	Y	K
緋 色	強い赤	4	95	10	0	95	95	10
草 緑 色	強い緑	11	90	20	68	0	92	20
濃 藍	暗い青	17	90	80	90	23	0	80
深 縹	暗い青	17	100	60	100	25	0	60
白	白	0	0	0	0	0	0	0
枯 野	明るく濃い橙	6.5	40	20	0	15	40	20
空五倍子色	深く濃い橙	6	70	80	0	35	70	80

〔表2〕俵屋宗達《風神雷神図屏風》（京都国立博物館、17世紀）の主要色の彩度（想定）

和名	色の種類	色相番号	トーン		C	M	Y	K
黄 丹	鮮やかな橙	5	95	0	0	71	95	0
草 緑 色	強い緑	11	90	20	68	0	90	20
笹 色	深く濃い緑	12	60	50	60	0	60	50
松 葉 色	深く濃い緑	11	80	50	60	0	80	50
仏手柑色	深く濃い緑	11	70	40	53	0	70	40

〔表3〕尾形光琳《四季花鳥図屏風》（18世紀）の主要色の彩度（想定）

和名	色の種類	色相番号	トーン		C	M	Y	K
丹 色	濃い赤	4.6	80	20	0	68	80	20
飴 色	強い橙	5	90	20	0	68	90	20
鉄 色	深く濃い青緑	14	70	80	70	0	35	80
呉 須 色	深く濃い青	17	80	60	80	20	0	60
膜 色	深く濃い青紫	18	60	60	60	30	0	60



〔図4〕作品《面構 喜多川歌麿と鳥居清長》略図
（図中の曲線：モチーフの形態を円形で解釈して筆者挿入）

■《面構 喜多川歌麿と鳥居清長》

（1972年・神奈川県立近代美術館）〔図4〕

さらに、構図と配色を関連付けた表現は、「面構 喜多川歌麿と鳥居清長」で群像によるモチーフにおいても特徴的である。ここでは、四曲一隻の屏風の金箔の画面に、左右に向かい合う2人の人物の他に、それぞれの背後に美人画の浮世絵を配置していることで合計4人による群像表現といえる。この不思議な組み合わせによる登場人物は何を意味しているのか。

歌麿と清長は、実際の年齢差とは別に、片岡は独自に若者と老人に描き分けているという⁽²¹⁾。二人一組で左右の画面に描き分けられている人物の形態について単純化して見直してみると、向かって左方の人物とその背後の女性像を両者合わせると大きく半円形をかたどる形態にみえる。向かって右方の人物に対しても同じく、後方の女性像とともにとらえると、右方の画面に大きな半円形をかたどっているとみえる。いずれの女性像も前傾姿勢で描かれているのは、その視線の延長線上の男性たちへ向けて観る者の視線を意識づけさせるためであろう。

画面の金箔の下地には、ここでは鮮やかな色を置いていないとみる。それは、左右の人物の関係性をより際立たせるためである。人物の衣の色は、人物間関係性に合わせて主に赤と緑の補色関係を意識して配色を決めている。向かって左の人物の背後の浮世絵の背景が黄色で平坦に塗りこめられているのも、金箔の質感と明らかに区別するためで、前後の人物を青と黄の補色関係で表すことで強く引き立て合いながら結びつけている。

衣には細密な文様を金泥で描き込んでいるところは、金属色の装飾的に華やかになる効果を活かしている一方で、金箔の下地塗りは省くなど、片岡は画

面全体における構成の意図に合わせて箔の効果の使い方を考えて描き分けている。このように、群像による人間像の対比的な関係性というテーマを重視し、左右対称の構図と色面構成により、平面空間における内的な広がりを感じさせる表現へと高めているのである。

琳派を代表する絵師の尾形光琳の《紅白梅図屏風》(紙本金地著色、MOA美術館、江戸時代)は、梅と水流は静と動、若木と老木は生と死を象徴し、金と銀の対比を構成に効果的に活かして表現していると解釈されている⁽²²⁾。モチーフの形態表現の抽象化と象徴的な意味を重ねていく表現は、能楽の世界観との関係も考えられているが、表現者にとって、形態表現の追求の果てに目指していこうとする段階として共鳴する何かがあるのかもしれない。19世紀のウィーン分離派の画家クリムト(Gustav Klimt, 1862-1918)も、日本の琳派やビザンティン美術に触発され、その金銀の手法を研究し、華やかな装飾表現の根底に生と死のテーマをみつめたというが⁽²³⁾、片岡の場合もまた、写生にもとづいた形態描写を土台に、そこから必要な線のみを選び取り、単純化した形に置き換えていくことでモチーフに確かな存在感をもたらそうとあがき、そして、みえない時の流れのなかに2人の人物を象徴的な存在に投影させた画面を浮かび上がらせてみせたといえようか。画面を超越した世界へ通じるような造形表現へと展開させたところに、そのスケールの大きさを感じさせる。

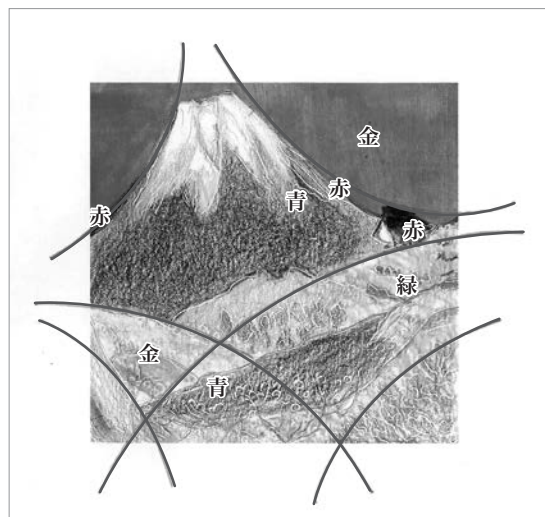
■《春の富士(梅)》

(1988年・茨城県立近代美術館) [図5]

そして、片岡にとって、形態の単純化への意識は「富士シリーズ」を通じて深まっていく。片岡は「富士シリーズ」に向き合うために、何度も富士の写生に赴いてスケッチを描き続けた。そして一個の山という限定したモチーフだけで巨大で深遠な画面を連想させる表現へと挑んでいく。

《春の富士(梅)》では、ここでも金箔の下地には色を置いていない。なによりも主役の富士山の深い青色系統の色を強く出し、背景の金地との美しい色の対比関係のなかで最も山の存在を強調させたいためであろう。また富士を正中からずらして配置し、曲線を誇張するような稜線を備えているような形態で描いた。これにより画面に生まれるのは、富士の稜線による、画面の遥か外にむかって通じる巨大な円弧を連想させる形である。富士の稜線に縁取られた鮮やかな朱色の曲線も、この稜線のカーブを強調するためである。青や金色のなかでわずかも強く存在感を放つ。一方、画面手前の、山並みが重層的

に連なる様は、画面を大胆に斜めの方向から区切る構成になっていて、ちょうど色の対比も富士の青と山並みの黄色が対比的に映えながら、それぞれの山が形成する、曲線のカーブが円弧をかたどってみえ、富士を中心にして強い関係性を作りながら、画面の外に四方にむかって湖面で水紋が広がっていくような波動による奥行感を感じさせる。



[図5] 作品《春の富士(梅)》略図
(図中の曲線：モチーフの形態を円形で解釈して筆者挿入)

ついに、片岡は多くの説明をしなくとも、自然の存在性を象徴する表現をつかみとっていく。

もちろん、《富士に献花》(1990年)のように、赤色を下地に置いてからプラチナ箔を貼り、金箔とはまた異なる温かみのある淡い灰色の空間を作る作品もある。ここでは富士は頂上を画面の上部すれすれの箇所に描き入れ、画面右方に稜線を長くみせるため、左寄りに配置している。その結果、画面右方に横長に大きくとられた空にあたる余白には、この色は、右方に赤みを帯びたアイボリーで描き入れた太陽の色と対比させることで、空と太陽は形の抑揚のない平面にありながら、奥行が生まれている。金銀箔の効果を理解して、画面構成に応用し使い分けているのである。

一方、ここではかつての「山シリーズ」で、山の激しい迫力を打ち出すことに一途にまい進していた画家の心は趣を変えている。富士が鮮やかで深く落ち着いた色を基調にどっしりと存在しているのに対し、その前景に描き入れている牡丹やひまわりなどの色とりどりの花については、橙色やピンク色、水色などの、中間色をアクセントとして取り入れている。これにより、四季の花々を前にした富士の存在は激しきや厳しきだけでなく、そこ

に華やぎが加わっている。むしろ「飾る」行為を楽しむかのである。片岡は、自身の多彩な色感を好む傾向について、故郷でみた北国の春の景観が原景となっていると語った⁽²⁴⁾。様々な種類の花々が一度に咲き誇る思い出の風景を富士と組み合わせで心象景に仕上げたのだった。

これら中間色については、片岡はルフラン&ブルジョア社製の西洋顔料も制作によく使っていたという⁽²⁵⁾。なかでも特に作品の軸としていた赤色系統の表現の幅を広げることに意欲的であったらしい。日本画へ西洋顔料を導入する試みは、片岡のみならず、すでに日本美術院の草創期の画家、横山大観や菱田春草（1874-1911）も、伝統的な絵具と西洋顔料を併用する試みを始めており、その表現効果に応じて使い分ける実験的な試みをしていったといわれる⁽²⁶⁾。片岡の場合は、フランスのこの絵具を、日本の伝統色を活かすために補助的に使い、厚塗りによる激しい感情表現に頼らなくとも豊かな彩色表現を一層高めていく。主役の富士に当たられた色は、片岡が実験を重ねて行きついた強く鮮やかで、かつ落ち着いたある深みのある色で、芳醇で味わい深い存在感を出している。そしてそれは金との対比によって華やかさを強め、また手前に添えた装飾には彩度を落とした色を当てること、主役の重厚感は一層増すのである。

＜結びにかえて＞

以上のように、片岡球子の画業人生の後年にあたる時期について、金箔と色との関係性において通観してみると、日本絵画や漆などの伝統美を土台に取り入れながら、絵画表現の要素としての扱いを重視する観点に移行していき、段階を経てやがて独自の華やかで激しい色彩表現へと昇華させた作品世界を確立させていったことがわかる。それは、日本画と洋画（油絵）が一堂に並べられて鑑賞されるという、現代美術の現場に生きる作家たちの置かれた環境に一因があるだろう。多勢のなかで瞬時に「個」を主張するために、片岡にとって金と色の強い対比的な造形表現とは、競争社会における重要な武器に等しい存在であったのかもしれない。ゆえに感覚を研ぎ澄ませ、高めていかねばという闘志を燃やし続けたのではないか。

片岡の表現の激しさとは、自身と厳しく向き合い、研究意欲を重ねた過程を経てつかみとったものであったことをあらためて知るところとなった。終生にわたって表現の探求を続けたその生き様そのものが、画家、片岡球子という唯一無二の個性を形成していったともいえるだろう。私たちは、その揺るぎない信念の歩みに「生」の意義を見出してみたくるのである。

（はらだ・ちかこ／中部大学民族資料博物館学芸員）

註

- (1) 原田千夏子「片岡球子の色彩表現と造形性について～赤系統の色を基調とした地塗り、本塗りによる制作工程」（中部大学民族資料博物館 年報12号、2024年、48-58頁）。『片岡球子画集』朝日新聞社、1980年他参照。
- (2) 永井信一「片岡球子個展評」（『萌春』88号、1961年2月、48頁）。
- (3) 片岡球子生前に話をきいた人物からの聞き取りによる。特にフランスのルフラン&ブルジョア社製の顔料は、ヨーロッパによける祭壇画用に発達したテンペラ画に用いる粉末状のもの。混色をしても鮮やかな色を保つ特徴の他、単一で鮮やかな色の種類が多いことで知られる。
- (4) 『岩橋英遠画集』求竜堂、1993年他参照。同じ北海道出身の日本画家、岩橋英遠（1903-1999）は、片岡と同時代に活動している画家の一人で、北国の自然風土で培われた感性で独自の世界を追求したが、その色彩表現は、朱色や黄土などの土系の絵具を基調に、画面全体には中間色の繊細な色調でまとめあげる作風を展開していった。鮮やかな色を主体とした片岡のそれとは対照的といえる。
- (5) 片岡球子に師事した画家からの聞き取りによる。片岡は当時、身近な教え子に自身の作品を前にして、指の指紋の痕を指し示して指で描いたことを語ったという。片岡球子「私の絵」（『版画芸術』No.13、1976年、128-129頁）にても片岡自身の言にある。
- (6) 荒井経『日本画と材料——近代に創られた伝統』武蔵野美術大学出版局、2015年参照。
岩絵具は原石を粉砕して粒子状に製造されるのだが、粒の大きさに応じて彩度が異なる性質から段階に分けられて精製される。粒が大きいほど彩度は高く、小さいほど白濁を強める。片岡は彩度が高く鮮やかな色を好むということは、粗い粒子の絵具を基調として扱う傾向にあったことを意味する。ただし、岩絵具の種類によっては、粒子が細かいほど彩度が高いものもある。[辰砂、石黄など。荒井著参照] 彩度の高い色の性質について、筆者はその上層に胡粉や墨、箔、土系の顔料や染料など重ねた効果を検証する実験をしたことがある。
中部大学民族資料博物館2013秋季企画展示 調査・研究報告「古典と現代の比較 顔料と染料における日本画の新たな表現」中部大学民族資料博物館、2013年参照。下層の色として置いた岩絵具や顔料、染料の鮮やかな赤（朱）、青（群青）、緑（緑青）は、上層の色層を通して透けてみえるとき、深い色みとなつて一層強い存在感を表すものとなる。筆者は重ね塗りの表現を実験した際に観察した。このとき得られる色とは、単一の絵具では表すことのできない複雑な、味わい深い表情を持つ。片岡は、自身の個性を「むっとするようなねばり気」と譬える色の表情とは、まさにこの色層の重ねによる岩絵具や顔料の色の特徴を言い表すに相応しい。
- (7) 坂崎担『日本繪畫論大系 I-V』名著普及会、1980年。
草薙奈津子現代語訳『芥子園画伝』芸艸堂、2002年。
- (8) 本間良助（正木直彦監修）『日本畫を描く人の為の秘傳集』厚

- 生闇、1933年。
- 原田千夏子「日本絵画における秘伝とし伝承されてきた墨と胡粉」(愛知県立芸術大学紀要35号、2006年、120-141頁[本間著書の一部改訳を試みた。])。
- 下川辰彦・原田千夏子「日本画の制作過程と素材研究(3)―日本画における青色をめぐる心象の遠像・近像表現」(中部大学現代教育学部紀要vol.3、2011年、11-29頁)
- (9) 本間前掲書、171頁「金下地の法―五法」
- (10) 本間前掲書、167-172頁「金銀総説」「金泥の法」「金泥を泥とする法―二法」「金下地の法―五法」「銀泥の法」「銀の錆押への法―三法」
- (11) 中部大学民族資料博物館2013秋季企画展示 調査・研究報告「古典と現代の比較―顔料と染料における日本画の新たな表現」中部大学民族資料博物館、2013年。
- 筆者は、実際に色層の重ね塗りの表現効果を再現する実験パネルを作成し、観察。鮮やかな絵具に箔を重ねた場合にできる色とは、派手さを抑えた落ち着いた色のある色みとなることを確認できる。
- (12) 片岡球子「作家の言葉 片岡球子」(「みづゑ」No.742、美術出版社、1966年、65-66頁)
- 片岡球子「私の絵」(「版画藝術」No.13、阿部出版、1976年)
- (13) 多田彬子「俵屋宗達筆 <楨檜図屏風>―装飾された金地の意味」(「美術史研究」早稲田大学美術史学会編、2010年、153-170頁。琳派『琳派絵画全集』日本経済新聞社、1978年他参照。
- (14) 片岡球子・夏目四郎「アトラうんじ 美術家と美術商」(『美術年鑑』美術年鑑社、1989年、48-49頁)
- (15) 片岡は、1961年から17年間にわたり、洋画家や彫刻家とともに研究会「新樹会」に参加し、作品を出品している。
- (16) 片岡球子「情(こころ)ありて」(図録「片岡球子展」中日新聞社、東海テレビ、1987年)。^{〔初出/神奈川新聞、1979年2月21日～8月8日〕}「生誕110年 片岡球子展」日本経済新聞社、東京国立近代美術館、愛知県美術館、2015年。
- 片岡はデッサンを学び直すため、1952年、東京芸術大学の彫刻家の山本豊市をたずね、マッスで捉える彫刻のデッサンを学んでいる。
- (17) 註6前掲。筆者は実験パネル制作により、粒子の違いによる胡粉の種類に応じて下地の色の見え方が異なる表現を確認。
- (18) 筆者は、主要な色の彩度を仮定するために、日本の伝統色のなかから近似の色を想定し、各色の色相と色のトーンの数値を参考にしただし古色による変色を前提に観察。ただし画集を参考にしているため想定域である。数値は、内田広由記『定本 和の色事典』視覚デザイン研究所、2008年参照。
- (19) 加山又造「随想・宗達光琳」(特集-2 宗達と光琳 日本装飾画の金字塔「みづゑ」No.812、美術出版社、1972年、57-60頁)。
- (20) 宮廻正明・林温「対談 宗達・技法と魅力」(「日本の美術」461、2004年、85-98頁参照。
- (21) 《面構 喜多川歌麿と鳥居清長》解説「片岡球子展」朝日新聞社、2005年。
- (22) 河野元昭「光琳二大傑作の源泉と特質」(『琳派絵画全集(光琳派1)』日本経済新聞社、1978年、21-30頁) 参照。
- (23) 千足伸行「《クリムトの芸術》グスタフ・クリムト―わが王国はこの世にあらず」(アサヒグラフ別冊83号「美術特集 西洋美術15 クリムト」朝日新聞社、1991年、75-80頁) 参照。
- (24) 「片岡球子の言葉」(「月刊ビジョン」vol.8-10、1978年12月、8-9頁)
- (25) 註3前掲。ルフラン&ブルジョア社製の絵具は、20世紀美術家の多くも愛用していたといわれる。余談だが、片岡は晴着に和装を着こなしたが、日常着は洋装で赤やピンクの赤系統の色を身近な装いに好んでいたという。色の観点からすれば富士シリーズは、等身大の片岡の感覚が取り入れられた構想としてみることもできるのかもしれない。
- 西洋顔料について、ホルベイン工業技術部編『絵画材料ハンドブック』中央公論美術出版、1997年。R.J. ゲッテンス/G.L. スタウト著、森田恒之訳『新装版 絵画材料事典』美術出版社、1999年他参照。
- (26) 荒井経、前掲書。「第一章 日本画と西洋顔料」参照。
- * 図1～5の略図は筆者作成。作図および愛知県立芸術大学時代における当時の片岡球子先生による制作指導の様子について、下川辰彦先生(日本美術院特待)より貴重なご助言を賜りました。ここに記し謝意を表します。
- * 表1～3は筆者作成。(数値参照：内田広由記『定本 和の色事典』視覚デザイン研究所、2008年)

中部大学民族資料博物館 年報 2024 13号 ©

2025 (令和 7) 年 10 月 31 日 発行

編集・発行 中部大学民族資料博物館 館長 中野智章
〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200
TEL 0568-51-9193 (直通) FAX 0568-51-9194
<https://www.chubu.ac.jp/student-life/facilities/museum/>
ISSN 2434-2491

印刷 不二印刷工業株式会社
